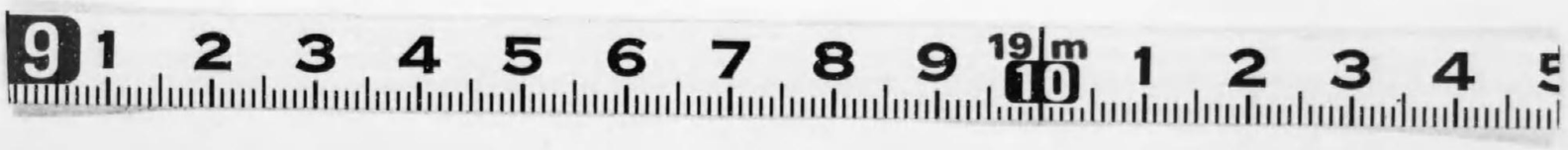
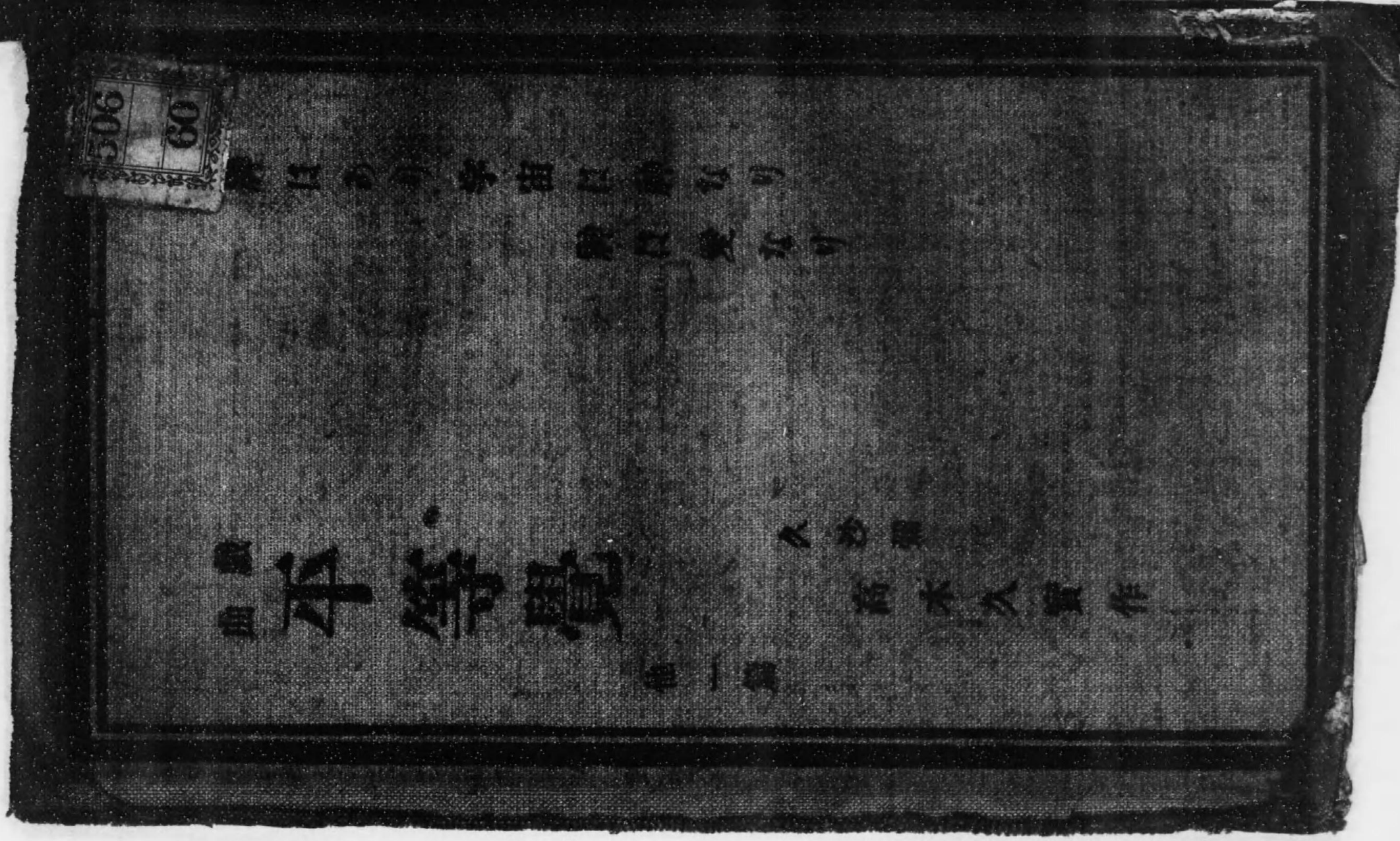

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 19 m 10 1 2 3 4



506
60

神はあり宇宙は神なり
神は愛なり

戯曲

平等覺

他一篇

久沙彌
高木久實作

506-60

戲曲平

等閱

他一扁

大正
11. 4 19
內交

戯曲

平等覺

三場　五幕

人物

日山重三	醫師	三十一歳
園子	重三の妹	二十一歳
村地恭助	重三の友人　醫師	三十五歳
内藤誠一	○○藥店の外交員	二十七歳
松平正盛	伯爵の嗣子	二十八歳
まさ子	重三の妻	二十三歳
こまち子	恭助の妻	二十八歳

松平伯爵　正盛の父　五十九歳
花世　正盛の妹　十六歳
柴山某　日山醫院の藥局生　十九歳
小野某　日山醫院の看護婦　二十一歳
及川某　松平家の家令　五十二歳

場所　關東のある市
時　現代

第一場　第一幕

（日山醫院の診察場。下手は廣き敷臺を正面に向つて見せた患者控室。）

用の玄關。其處に火鉢、座蒲團等適宜の位置に配置せられ、新聞雜誌數種亂雜にちらばつてゐる、玄關の正面は藥局の體にて投藥窓を見せ、窓の上に○○郡醫師會規定が貼られてある。玄關の右手は診察室。境界の硝子障子は奥寄りに押し開けられてあるが內部には大きな木の衝立があつて控室より診察室の內部を窺へぬ樣にしてある。診察室は舞臺の約二分の一の廣さを占め、こゝに院長用の机と椅子は其殆んど中央におかれ、患者用の回轉椅子、診察臺小手術臺、休息用のソツファー等よろしく配置され、外科用のメス、鉄等を入れた四方硝子の戸棚は特に人眼を牽く。診察室の右手及奥は壁になつてゐて時計一個、油繪二枚適當の位置にかゝつてゐる。奥の住居の方に通ずるドアが右手壁の中程にある。猶診察室と藥局との間は半間のドアによつて直接其間を通ふ事が出來る樣になつてゐる。すべてよく流行る青年醫の診察場の體。幕開けば人影なく森とした中に時計は鋭く四時を打つ。）

園子——（藥局のドアを開き、よろめきながら眞蒼な顏をして診察室に現れ、ぢつと正面を見る。眼の色は

にぶい中に物凄い響がある。暫くして其目を時計に移し、急に驚くこなし。）もう四時。あゝもう四時だ。あゝわたしどうしよう。今日に限つて何日も置いてある處に鍵がない。どうしたんだらう。でもどうしても探し出さなくちやならない。（急に氣つきたる體にて）おゝさうく、きつと兄さんの机の中にあるに違ひない（絶へすさし込んで來る激烈なる疼痛にしつかと下腹を壓へながら、蹌踉として中央の机の方に進む。抽出を開ける、上半身を机の上に投げる樣にして抽出の中を引掻きまはす。）あゝ無い。こゝにも無い。兄さんが隱したんだ。きつとさうだ。兄さんはもう歸つてゐらつしやる。歸つてゐらしつたら……歸つてゐらしたら……さうしたら毒藥棚の鍵は何處につてきこうか知ら？おゝどうしてそんな事がきけよう。知つてゐて隱くしなすつたんだもの。そうに相違ない。（間）あいた……（突然激痛が襲つて來る。片手を机にかけたまゝ苦悶に身體が硬直しさうになる。疼痛は一しきりしてやゝ輕くなる。ほつと吐息をする。）あゝ死ぬにも死ねないんだらうか。あゝ苦しい。死にたい。死にたいよう。神さま。母さま。わたしを呼んで頂戴。（そつと頭を上げ不圖四方硝子の戸棚の中の外科器械を見つける。發作的に机から手をはなしすつくと立つ。）おゝあのメスで。いゝものがあつた。あれで死ねる。あれは骨でも脚でも斬れるメスだもの、わたしの咽ぐらひは……（一歩々々怖いものに近寄る樣に硝子戸棚に近寄る。よろ〳〵と倒れんとして戸棚につかまる。其拍子に戸棚はがたりと音して戸は自然に開く。思はず手を無性につき込みメスを摑み出す。一本はかちりと鳴つて床に落ちる。落ちたものには全然氣がつかず。手に殘つた一本のメスの鋭い鋼色にぢつと見入る。涙が流れて出るのをメスを持つた手の甲で拭ふ。）あゝ夢ではないか知ら。いや本當だ。昨日からのわたしの變りよう。神さま、わたしは何と云ふ運命のものでせう。おゝ神さま、おゝ兄さま、今から……今からわたしは死にます。母さま。懐かしい母さま。あなたのお傍へ行けるのがせめても樂で御座います。（此時、重三は急ぎ足にて登場、玄關に現れ、一寸立ちどまり奥の方に耳をすます。閨子はメスを咽喉に擬する、其瞬間下腹部に激痛がおこりばつたりと倒れる。メスはするどい音を立てゝ飛ぶ。重三は疾風の如く驅け込んで來て、此有樣に仰天して倒れてゐる閨子を上から抱きしめる。）

重三――園さん、これ園さん。無分別な事をしてはいけない。こんな事をしてはいけない。あゝ何と云ふ事をして呉れるのだ。（間）しかし無理はない、無理とは思はぬが……（園子が疼痛に苦しみて身をもだへるので下腹部に手をやり力を入れて抱く）。痛むか。苦しいか。うん苦しいだらう。死にたくなるだらう。決して無理とは思はない。思はないが……お前に死なれたら此の俺れはどうなるのだ。夫れを思つて呉れ、俺れの心の中も察して呉れ。園子。（園子は歯をくひしばる、一苦痛に堪へようとつとめる。一言も發する事が出來ない、兄を見上げて眼で憐を乞ふ。）

重三――あゝ、わかつてゐるよ。兄さんはお前を幸福にする。兄さんはどんな事をしてもお前をもとのお前にしてあげる。さあ……兎も角も奥へ行こう。兄さんにつかまりなさい、大變な熱だのにこんな處にぢつとしてゐては惡い（園子を抱きかゝへ獨白。）柴山や小野は一體どうしたんだらう……ちよつ、仕方のない奴共だ。

園子――兄さま。わたくしがお使に出しましたの。二人とも……。

重三――あゝさうか〳〵。お前が。うんさうか。よし〳〵。兎に角、熱がひどいのだから寢てゐなければならない。（二人ドアを開けて奥へはいる。）

藥局生柴山大きな梨を二つ手に持つて急ぎ足にて登場。

柴山――今頃に梨だなんて、無理な註文に弱つちやつた、何處へ行つたつて小ぼけな八百屋にありやしない。やつとあつてよかつた樣なものゝ……（間）えゝと大分時間がかゝつたが先生は未だ歸つてゐないか知らん。どんな事があつても留守にしてはいけないと云ひつけられておつたのだが……。（看護婦小野も亦急ぎ足にて登場。）

小野――おや柴山さん、御苦勞さま。今お歸りになつたの？。

柴山――はあ、さうです。あなたはどうしたんですか、僕は梨買ひに行つたんだが――此頃、梨は方々さがしたつてありやしませんでしてね。やつと之（梨を見せ。）あつたのはあつたのだけれども苦心しましたよ。

小野――わたくしも。どうしてもアイスクリームをたべたいと仰しやるので。今頃ア

イスクリームつてどこにもないてせう。お宅で造らなくちやならないてせう。だから仕方がないから、金物屋でアイスクリームの機械をわざ〳〵藏から出して貰つてそして氷と南方買つて來たのよ。あなたが出なすつて直ぐに、云ひつかつて出かけて今なのよ。

柴山——（けげん顏で）おや〳〵。（間）之れは變だぞ。（身を轉回して玄關に飛び上る。看護婦も飛び上る。此時園子をれかして、診察室に出て來た重三とあはや衝突を演ぜんとする。）

柴山——やつ先生お歸んなさい。

重三——お歸へんなさいちやないちやないかひつけておいたんぢやないか。決して空けちやいけないとあれだけ云

柴山——はつ、でもお嬢さんが……。

重三——園が云つたつてさ。小野も二人とも病人をうつちやつといて出かけて行くなんて（間）で歸つて來るとなりや二人とも一緒に……。

柴山——何か御座いましたか先生……。

重三——いや何もありやしないが……（氣がついて落ちてゐる一本のメスを足で踏む。）さあ二人とも奥へ——いや柴山、何だね君の持つてゐる夫れは？。

柴山——はいお嬢さんのおいひつけで買つて參りました、梨で御座います。

重三——さうか、夫れは小野に渡して、君は玄關にゐて、今日は患者は斷るんだよ。

柴山——は、かしこまりました（梨を看護婦に渡す。）

重三——誰でも皆ことはるのだ。

柴山——は、承知いたしました。

重三——小野、お前は奥へ。靜にするんだよ、神經が興奮してゐるからね。

小野——は、かしこまりまして御座います、お免遊ばせ。（奥に入る。柴山は玄關に出て行き火鉢の傍に坐り、新聞を取り上げて見入る。重三はそつとメスを拾ひ上げて戸棚の中に入れ。頭を抱へこむ樣にして奥へはいる。）

村地恭助登場。和服で、堂々たる風采。快活なる容貌、握り太の籐のステッキを携へてゐる。

恭助――やあ、柴山君。日山はゐるかい。

柴山――（慌てゝ。）あゝ、村地先生。内の先生は今、ゐらつしやいますが……。

恭助――さうか、ゐるなら……（上らんとする。）

柴山――ちよつと、ちよつと先生……。

恭助――何だね？。

柴山――ゐらつしやるにはゐらつしやいますが……。

恭助――何を言つてゐるんだ、ゐると今云つたぢやないか。

柴山――夫れはゐらつしやるのですが今日はどなたにもお會ひにならないんで……。

恭助――會はない、誰にも？。……へえん、俺れにもかい。會はないと云つたかい。

柴山――いゝえ、別に先生にと仰しやつた譯ではないんで御座いますが、總體となたにも會はないと仰しやつたんて……。

恭助――はゝん、病氣かね。

柴山――病氣では御座いませんが、併し御病人も御座います。

恭助――誰がだい、惡いのは？。

柴山――お嬢さまで、それに外に……。

恭助――はあん園子さんが、之は妙だ。あの達者な人間が？外にも惡い人があるのかね。

柴山――いや外に取込んだ事も御座いまして……。

恭助――何、とりこんだ事？（考へる。）そして病人もある？（間）兎に角一度俺れも診てやりたい。（通りかける。）

柴山――（中腰になり。）先生、それが困りますんで。

恭助――おかしな事を云ふ男だなア。何か勘違ひをやつてゐるんぢやないかね、相手は俺れだよ。日山の親友で、さうして醫者の俺れだよ。

柴山――よく存じております。(間)さうして御座いますなあ、誰てもと仰しやつたけれども、多分先生は別で御座いませう。では一度きいて參りますからどうかちよつとお待ちを願います。(立たんとする。)

恭助――(憤然と。)おい……。

柴山――(驚く。)

恭助――きいて來なくてもいゝ、箆棒な。物の程度を知らない男だ。君はゐるかゐないかを答へればいゝのだ俺れは通る權利がある。(玄關に上り委細構はず足速に診察室に入る。)

柴山――(呆れて。亂暴な人だ、(後から跟いて行く。)

恭助――(荒々しく診察室を通りぬけやうとする。其時重三苦悶の體にて奥から出て來る。)おゝ、日山。

どうしたんだ。貴樣あ?。

重三――おゝ村地か。

恭助――どうした?どうしたんだい。一體其顏は、夫れに今柴山にきけば園子さんが惡いんだつて。

重三――(眩しげに恭助を見上げ。)おゝ。(頭を掻きむしる。)

恭助――どうしたんだい、云はなくつちやわからないぢやないか。どうしたんだい。(四邊を見廻はし落ちてゐる一本のメスを見て眉を顰める。)おい、向ふにメスが落ちてゐるね。

重三――えつ、メスが?。

恭助――夫れ向ふに……。

重三――おゝ、未だ一本落ちてゐたか。

恭助――何?。未だ一本だなんて?!。

重三――村地!。(間)。大變な事になつてしまつたんだよ、實は。

恭助――大變な事になつたつて？。

重三――目茶々々だ。

恭助――言へ何だ、言つて呉れ。

重三――泣くにも泣けない。悲しむにも涙も出ない……。

恭助――ふうん、何事かあつたんだな（間）兎に角云つて呉れ。どんな事でも云つて呉れ。俺れも共に苦しんでやる。

重三――聞いて貰はう。（間）君には聞いて貰ひたい。あゝ、こんな事になる前に、始めから君の耳に入れておけばよかつたかも知れない。いや、入れた處で仕方がなかつたらう。運命だつたのだらう。（間）實は、園が非常なる凌辱にあつたのだ。

恭助――えつ、園さんが？。

重三――園だけぢやない。俺も、日山一家は皆凌辱の血の池の中へ一塊りにほり込まれちやつたんだ。夫れに、今俺れが、斷るに斷り切れない患家から歸へつて來たら、園が今一歩て、メスて咽喉をつこうとしておつたのだ。

恭助――園さんが自殺を？。

重三――死ぬのが當り前だ。生きちやおられまい。死んて苦痛を無くしようとするのは當然だ。あゝ二十一年の青春も泥まみれだ。むしろ捨打つておいて死なしてやればよかつた。

恭助――ば、ば、馬鹿な。何を云ふのだ篭棒な。（間）兎に角どんな事があつたんだ、夫れを早く言つて呉れ。

重三――あゝ、之れが平氣で語れた事か、云へる事か。（間）しかし聞いて貰はう。どうか閉いて呉れ。實はほんの三四日前、園の緣談が持ち上つたんだ。

恭助――はゝん。初耳だ。さうして相手は？。

重三――相手は、增川――君も知つてゐるだらう。舊藩の一番家老……。

恭助――おゝ知つてゐる。あの、何かい彼れの息子の、何とか云つたなア東京の高商

に行つてゐる男ぢやないか。

重三――あゝ、そう、其男だ。

恭助――誰が持つて來たんだね、其話は？。

重三――夫れは松平家の家令の及川と云ふ人間だ。

恭助――あゝ、あの男か、あれあちこと評判のよくない男だが、さうして君は承知したのかい。

重三――さあ家柄は別に非難の打ち處はなし、夫れとなく會つて呉れと云ふから相手の男に會つて見ると人物もよかりさうだし、實は園も知つてゐると云もんだから承諾をしたわけだが。さうすると媒介人の及川が云ふのには、話がきまつたからには早く式を擧げたい、夫に增川の淸吾――相手の男の名だが、淸吾が三四日中に東京の學校に歸る。學校ももう後一年と云ふ處だから卒業まで待てばいゝ樣なものゝ此一年の間に萬一身持でも惡くする樣な事があつちや困るから、親の希望で急に內祝言

をさして一緒に東京へやつて貰へまいかと云つて來たんだ。こちらはあまり急な話だから、最初は用意なんかも出來てないからと云つて斷つたんだが、すべて略式で何れ十分な事をして正式の披露はせねばならんが、夫れは其時の事として、兎に角本人を東京へ連れてやらぬと間違があつては困るといふ一點張りでとう〳〵內祝言を昨夜さすことになつたんだ。急の事ではあるし、こちらからは俺れと權濱にゐる叔母と二人。先方てもほんの內輪の事だからと云ふ譯て、夫れに親の增川は其朝急用て東京の松平家へ行つたとかで相手の男と叔母だとか云ふ女と――母親は死んでないさうなので、及川とそれだけて式を濟ましたようなお譯だつた。式が濟んで妹を殘して俺と叔母は歸つて來た。(間)あゝ夫れから後て何が行はれたか。(間)云ふにしのびん。(間)俺れが歸つたのは……そう、十一時はすぎてゐたらうか、叔母は宿れと云つたんだが、據ん處ない用があるといつて終列車で橫濱へ歸つたから、俺は驛まで見送つて行つて歸つて來た。それから寢床へはいつて暫くまどろんだ頃、表の戶

を割れる様に叩くものがあるぢやないか。暫く叩いてゐるが柴山も起きさうにな
し、夫れに俺は最初の叩き始めから、何だか魂を打たれた様な感じがしたもんだ
から自身で起きて行つて玄關を開けたのだ、さうすると。(間)さうすると、其處に正
助が——あの漁夫の正助が電燈の薄あかりに、見覺へのある長襦袢を着て死んだ様
になつてゐる體をおぶつて立つてゐるぢやないか……。

恭助——ふゝん。(唸る。)

重三——はつと、何か豫感が當つたと云ふ様な氣が電氣の様に身體を通過した。萬事
休すと云ふ様な感もした。夢ではないかとも一瞬の間に思つた。正助どうしたのだ
ときくと、體が雨に濡れて——其時見ると小雨が降つてゐたがね、城川の堤を何か
口の中でつぶやきながら歩いてゐるのに會つたから膽をつぶしたんだが、どうしたん
と云ふと逃け出さうとしたからつかまへると死なして呉れと云ふのださうな、それ
を無理やりに連れて來ようとしたら途中で氣が遠くなつて倒れさうになるからおぶ

つて來たと云ふんだ。

恭助——あゝ、一體どうしたんだ。

重三——あゝ何もかも目茶々々だ。(間)あまりに慘酷だ。あまりな運命だ。あの俺れの
たつた一人の妹を神の犧にでも召された事か、惡魔の一夜の快樂の犧牲になつた
とは……(間)世の中は眞暗闇だ。俺は神の攝理を呪ふ。(間)正助から受けとつて、妹
を奥へ寢かして、やつと正氣に戻した上で、どうしたんだときくと泣いて泣いて
(重三泣く。)そんな事を聞くかはりに殺して呉れと氣も狂はんばかりだ。やつとなだ
めすかして聞くには聞いたがあまりの事に涙も出なかつた。えゝ？どんな事があつ
たつて？。

(此時内藤誠一玄關を上り藥局の窓から内部を窺ひ、誰もゐないので診察
室の方へ行こうとする。診察室に人聲がするのできゝ耳を立てる。)

此時舞臺は突然ダークチエーンヂとなる。

第一場　第二幕

（増川家奥座敷。下手の部屋は日本室に西洋風を加味したる装飾。廣き廻り縁正面には床、違ひ棚　他室に通ずる襖、下手は障子、障子の外側は縁で其下手は柴折戸で庭の一部を見せる。床には花瓶を飾き、中央に小型のテーブル、周圍に椅子若干を配し、下手障子寄りに今一個のテーブルあり、机の上には書物がうづ高く積まれてある。總て増川淸吾の書齋兼應接間の體。其隣り上手の部屋は正面に丸窓を見せ、書齋との間は障子がしまつて見へないようになつてゐる。ダーク去れば書齋の方には五燭位の電燈が半燭光の狀態でほの暗く照り、寢室の方は全く暗黒で舞臺には人影がない。

聽て人の氣配がして暗き寢室の障子をしとやかに開けて、花やかな長襦袢を着た園子が身づくろひしながら出て來る。中央のテーブルを過ぎ障子寄りのテーブルのあたりまで來て立つ。さうすると間もなく寢室にて人の氣配がする。園子は恥かしげに其方を見る。聽て寢間着姿の男現れる。園子は吾を向ける。）

男――園さん。

園子――はい。

男――もつと燈を明るくしませうか。

園子――わたくしが致します。（中央のテーブルの方に行こうとする。）

男――いや暗い方がよくはないてすか。

園子――わたくしはどちらでも……。

男――いや、きつと暗い方がいゝ筈です。さうでせう。

園子――わたくし、別に……。

男――どらでもいゝと云ふのてすか、（間）闇は神秘てすからね。闇の中には人間は盲目てす。園さん、こちらへおらつしやいませんか。

園子――はい。（行かんとする。）

男——いや、其處にゐらつしやる方がいゝでせう。美人のほの暗い處にぼうと立つてゐるのは何とも云へないものだ。園さんあなたは幸福だと思つてゐますか。

園子——はいわたくしは……。

男——さう幸福ですとも、事實はどうあらうとも、幸福だと思つてゐる事が幸福なんです。幸福も認識ですからね。人間に人間の忍識以外何がありませう。闇の中の幸福……闇の中では帝王も乞食も、其者が帝王であり、其者が乞食である事は、本人以外にわからない、乞食が帝王だと叫んだら本當の帝王はどうして彼は帝王でないと證明出來るか、けれども男と女とは闇の中でわかるものですね。我れこそ帝王だと證明出來るか、けれども男と女とは闇の中でわかるものですね。之は妙なものだ。しかも明瞭に、必要なお互の間にはわかる。尤も、解つた處で、夫れは帝王たる男であるか乞食たる男であるかはわからない。常闇の人間界が夫れだ。でもわからなくてもいゝのかも知れない。帝王だと思へばいゝのだ。いや結極男であり女であればいゝのかも知れない。園さん。あなたどう思ひますか。

園子——わたくしはそんな事は別に……。

男——どうでもいゝと云ふんですか。わからないでもいゝと云ふんですか。はゝゝ。こちらを向いて御覽なさい。

園子——（斜にふりかへりほの暗い燈を越して男の方にちらと眼をやるがすぐに恥かしさに眼を伏せてしまう。）

男——どれ燈を明るくしよう。さうして綺麗なあなたの顏を晝の樣な光の下で見せて貰はう。（つかゝと中央にすゝみテーブルの上のスイツチを捻る、室は一時に明るくなる。園子は顏を伏せる。）

男——園さん。さあこちらを向いて下さい。

園子——（輕い恥笑の顏を擡げ男の方を見る。見た瞬間園子は反けそらんばかりに驚く。忽ち眞蒼になる。わなゝと今にも倒れる樣に震へる。）まあ！。

男——わたしです。間違もないわたしだ。松平正盛です。園さん、どう、驚いたかね

はゝゝゝ驚いても、喫驚しても、今更間違ひのない松平です。清吾だと思つておつたのてせう。無理はない。そりや無理もないが今の今まで清吾だと微塵も疑はないであなたの、大事の操を自由に任かしておつた男は此の松平ですぞ。闇の中で眞暗闇の中て、あなたのお相手をしたのはわたしだ。此電燈が先きについておつた時の電燈の下の男は清吾だつたが、闇の中の帝王はわたしだつた。いや帝王とて自由に受けられん處女の眞心のこもつたもてなしを受けた幸福な男はわたしだ。あゝ實に愉快だつたなア。

（園子はたほれんとして漸く椅子につかまる。壯と失神したやうな眼で正盛を見てゐる。身體はたへすふるへてゐる。）

正盛——さあ、どうしますか。既にこうなつた。とりかへしは絶對につかない。わたしを許して呉れますか。はゝゝ、よもやさう寛大なあなたてもあるまい。いやさうなりやさうてあへて詫まりますまいよ。しかし悪い男ではないてせう。あなたと云ふ女を、自分のものにしたいと願つておつておつた男だから悪い筈はない。熱心に思つた男なんだから悪くまれる譯はない。其の熱心が生んだ一芝居てさあ之は、一通りてはとても駄目だとわかつた上句の苦肉の策略てす、覺へてゐるてせうわたしはあなたに戀を求めた。さう手紙だとか、贈物だとかそしていろ〳〵の策略、あなたの家の看護婦と書生は一時わたしの看護婦と書生てした、之れまて苦心をしておつた事を今に思ひ當りませんか。あなたを我物とするために拂つた犧牲も中々大きいものですよ。ちつと思つて下さい。あなたをわたしのものとするのは寧ろ容易だと呑んてかゝつたが甘く行かなかつた。「正」と云ふ手紙が幾らあなたの手に入つても夫れは恥かしさが抗んだ。と私は思つたのてすよ。なあに女は——普通の女は譯はないものてす。顔て十中九の問題を決して夫れを先入主として相手方を見て行く、淺薄なものだ。悪い先入主でない限り占めたものだ。夫れに費用を惜しみませんからね。若い目的の妻君が、ショウキンドーに覗き込んてゐるうしろから、わたしの

顔を見せて百圓札をつかましたら先づ陥落しますよ。そんな譯で此町ぢや目ぼしい女は大抵もうわたしの洗禮を受けてゐる。唯あなたにはしくぢりましたよ。段々深身へ行つて、掌の上にあなたを載せて隙を見てゐるまでに行つたんだけれども番人がついてゐるあなたには、兄さんと云ふ番人が。此番人がとても目的を達させないのですよ。わたしは此女と狙つたらものにせずにはおかない。其人の長所を利用し其人の短所を利用して乘り込んで行くのですが。唯番人が一番怖ろしい、一等難儀です。あなたの番人があまり熱心に見張りをしてゐるもんだから手を引いたのです。一端は——併しさうなると煩惱はいやまさる、たまらなくなつて來るのです。況んや町の他の全部の女と一人とかけかへていゝ、あなたですもの。私の血の中に流れてゐる因襲的なはげしい慾望はつひに今夜の樣な計畫を生ましめたのです。あなたは罪な人だ、むしろ。(間)はゝゝゝ、之は隨分勝手な理屈ですかね。及川も增川もわたしの家來でね。わたしの云ひつけ通りになりました。(間)あゝ併し濟んで見れば夢の樣なものだ何だかつまらなくなつちやつた。(間、併し考へて見ると之は法律に觸れてゐるなア、警察へ訴へますかね。あなたは多分訴へて出るでせう。仕方がない。蒔いた種は刈らなくちやならん、刈りませう。訴へて下さい。けれどもいよいよ訴へられるものなら、さうだ、するだけの事はしなくつちやつまらない。(正盛は園子に近よる。園子は逃げんとするが、逃げる力もなく、よろゝゝとして、又椅子につかまる。正盛は近づいて肩から横腹に兩手をかけて抱こうとする。)

園子——あれ！誰れか來て……(身をもがく。)

正盛——はゝゝ、誰れもゐやしませんよ。幾ら呼んでも誰も來やしない。あなたはわたしの絶對自由だ、どうでもなる。先さには好んでわたしの自由になつた。今はいやと云ふなら手籠めにしても自由にして見せる。いくらてもどうても出來る。人を呼だらわたしの目的を助けに來るがあなたを助けに來るものは一人も來ない。番人も近くにゐないし。どうしても。あなたは、結極わたしに反抗する事を許さ

れないんだ。(園子は唯手を空に振るのみでなす事を知らぬ。園子を横だきにしたまゝどつかと椅子にかける。膝の上に園子を抱き上げる。園子はくつたりしてしまつてゐる。)

正盛——はゝゝ、こうなると意氣地のないもんだなア(上から顔を覗き込む。)いや、綺麗だと思つた顔も、こう蒼ざめると物凄いものだ。もうよさう〳〵。やめた。さあ何もしないから立ちなさい。(膝から下ろして棒を立てる樣に園子を床に立てる。ふら〳〵と倒れんとするのを正盛が片腕をつかんで支へる。)さああなたの自由をかへしてあげませう。どうなりとなさい。ここにゐますか? 兎に角朝までこゝにゐますか。夫れともあなたのお宅はこゝから半丁とないんだから歸りますか? これから——さあどちらなんだ。(園子行かんとするが知くする。)はゝあ歸ると云ふんですなア、ちや歸りなさい。裏門の處まてわたしが連れて行つて上げよう、さあ歩きなさい。夫れ! (後から小づく、園子床の上によろ〳〵と倒れる。こゝにて再びダークチエーンザとなる。)

第一場　第三幕

(第一幕と同じ日山醫院の診察室。重三と恭助と二人以前の姿のまゝ相對してゐる。)

恭助——うむ、察しるよ。貴樣の心の內は察しる。夢の樣に思ふのも無理はない。夢で濟まされたら濟ましたい。けれどもすまん、之は何とか處置をつけなくちやならない。我輩の腹のうちすら煮へかへる樣だ。貴樣の腹の中は形容に言葉があるまい。よし復讐してやるぞ。之れに一千萬倍まさる方法で誓つて復讐するぞ。しかし復讐と云つた處で、之れ以上の痛苦を與へる復讐があるだらうか。彼奴を鏖殺しにし、彼奴の一族を鏖殺しにしても償へるか。之れ以上の慘忍が何れにあらうか。あゝ大變な事になつたもんだ。地球と天とを以てしても、之を償へるか。

重三——村地。實は未だ此の上に云ふにしのびん慘虐な目にあつてゐるんだ。

恭助——まだ以上に！何だ、夫れは、何だ。

重三——夫れから、園は疲れて、ぐつたりして睡むつてしまつたんだが、今朝眼を覺まして、非常に苦しいと云ふから診ると大變な熱なのだ。

恭助——熱！どの位？。

重三——三十九度から四十度ある。

恭助——お負けに風を引いちやつたのだな。

重三——俺れもさう思つた、風だと思つた。雨の中をうろつき廻つたんだから。處がさうちやないんだ。熱の外に下腹部に激烈な疼痛がやつて來るぢやないか。おい村地。園は淋毒性の急性內膜炎を起してゐるんだ。

恭助——ええ！ふうん！。

重三——あゝ〳〵何たる事だらう。魂は叩きのめされて、肉體は嚙みくだかれた。

恭助——さうか、うん、さうか。ぢやあ大變な疼みだらう。

重三——見ておられないんだ。痛がつて。今更どうも仕方が無い事だがあまりに殘念な出來事ぢやないか。

恭助——察するよ。お察しするよ。あの咲いたばかりの花を、何とも云ひ樣のない事だ。で痛みの方はどう處置してある？。

重三——どうつて、處置のしようもない。冷淹法をとつてゐるだけだ。どうにもしようがないんだから。

恭助——何とか苦痛をとめてやりたいものだなア。

重三——見ておられんからモヒてもと思ふんだが、未だ〳〵此疼痛は暫くつゞくだらうから、睡眠れない時が來るから。其時に睡眠劑と兩方かけてモヒをやらうと思つて、今は眼をつむつて打ちやつてあるんだ。何かいゝ處置の方法があればだがなあ……。

恭助——さう、あればよいのだがなアー。

重三——ないだらうね。

恭助――ないと思ふね、情けない事だね。

（誠一診察室にはいり、お辭儀をする。）

重三――やあ、何しに來たんだ、君は……。

誠一――唯今思はず御話を伺ひまして……。

重三――なにつ！。はなしをきいた。すつかりきいたと云ふのかい君は？。大變な人間にきかれちやつたなあ。あゝ、實に踏んだりけつたりだ。何たる弱り目に祟り目だ。

恭助――何だ此人は？。

重三――〇〇藥店の外交員だ。

恭助――何だ藥屋の外交員！おい、こら！。君、出て行かんか、何しに無斷て上つて來るんだ。人の家へ。不埒な男だ、出て行け！。

誠一――はあ、出て行けと仰しやりや出て行きますが、承りまして私も拳を握りました。けれども恰度御嬢さんの御病氣によい藥がありますので……。

恭助――馬鹿野郎！圖々しさもほどこそあるぞ、此の痛恨に泣いてゐる我々をつかまへて藥を賣込まうなんて、馬鹿にするもいゝ加減にしろ、叩き飛ばすぞ、本當に：

誠一――決してあなた方を馬鹿にしてゐる譯ぢや御座いません。眞實御同情しまして夫れにいゝ藥もありますから

恭助――默れ！泰西醫界の精を以てして、手のつくし樣のない急性淋毒性內腹炎に貴樣の樣な山師の持つてゐる賣藥同樣の藥がきいてたまるか。足許の明るい內に歸れと云つたら歸れ。

誠一――そんな事仰しやらずに一度無駄だと思つて目前の御病人にお試しになつては如何でせう、御病人が御可愛さうですから！。

恭助――（怒に震へる）つべこべ喋つてゐやがると、こら！本當に張り飛ばすぞ、皆醫者はお前等に馬鹿にされてゐるか知らぬが俺れはちと違ふのだぞ。歸れ野郎！（誠一に追つて行く。）

誠一――（少し後に退き。）本當に治るのて御座いますのに、お氣の毒で御座いますなア。

恭助――やい！。（誠一を突き飛ばす。）さあ出ろ。さあ出てうせろ。

（此時柴山奥から現れ、呆れ顏。）

柴山――先生どうなさつたんですか、内藤君が何かやりましたか。

恭助――あゝ、好い處へ來て呉れた。此野郎をつまみ出せ。

柴山――つまみ出せつて、何か惡いことをしたんてすか、内藤君が？。

恭助――此野郎、此のどさくさまぎれに藥の賣込みをやらうとしやがつた、太い圖々しい野郎だ。

柴山――先生、内藤君はそんな人ぢやありませんよ。

恭助――なに、そんな人ぢやない？。

柴山――珍らしい人格の高い人で、僕は實は師事して教を受けてゐるんてすが……。

恭助――なに、な、なに？教を受けてる？へゝん此の人間にかい。

柴山――（重三に向ひ。）先生、何日も玄關へ内藤君がやつて來ると、私は引きとめて内藤君にいろ〳〵聞かして貰つてゐるのですよ。夫れに先生、お嬢さまても藥屋には珍らしい人だと何日か感心してゐらした事がある位で御座いますよ。

重三――へえん、さうかい、此人が、さうかい。

柴山――内藤さん、どうもなりはしませんか。

誠一――いゝえ、別に何とも……。

恭助――之れは驚いた。さうかい。早くさうならさうと云つて呉れゝばよかつたのに君堪忍して呉れたまへな。君が立聞きしたと云ふから、馬鹿にかつとしてしまつたもんだから。

誠一――いゝえ、何とも御座いません。私こそつひ思はず立ぎゝしてしまつて申譯が御座いません。

重三――本當に君いま云ふた君の藥はきゝますかね。あの病氣に。

誠一――はあ、確かによろしう御座います、お嬢さまがわたくしの妹て御座いましたら、わたくしは何をすてゝも氷の冷罨法をしないてもわたくし共の薬を靜脈に注射いたしますでせう。

重三――君の妹なれば？。

誠一――はあその塲合を想像致しましても。

恭助――どの位注射するんですね君？。

誠一――先づ二百瓦位おやりになるとよう御座いますでせう。

重三――一度にとまりますか疼痛が？あんなに苦しんでおつても……。

誠一――多分七八分は一度にとまりますでせう。

恭助――夫れが本當なら地獄に佛だね君の來て呉れたのは、むしろ。

重三――一體何が幸福になり、何が不幸になるかわからないもんだね。

誠一――ちやなくて、何もかも幸福になるのては御座いませんてせうか。私はさう思ふのて御座いますが……。

重三――ふうん……。

小説平等覺の前書

無量壽經は小説である。ドストイエフスキーの罪と罰が小説であり、トルストイのアンナカレーニナが小説であると少しの相違もない。罪と罰が非常なる力作であり、アンナカレーニナが苦心の力作であるに比し更により以上尊まるべき力作である。無量壽經は前記の罪と罰及アンナカレーニナ又はドストイエフスキーの名作たるカラマゾフの兄弟、トルストイの復活等の小説に含まれてゐる樣な種々の内容と同種におかるべき色々のものを備へ持つてゐる。であるがこゝに一つ作者の述作の目的の深さに於て、及述作の動機に於て相違してゐる點がある、それは小説無量壽經は作者(不明)が宇宙の愛を體驗して味ひたる盡きざる滿悦、佛陀の愛に抱擁さるゝに至りたる歷へるにも歷へ切れない歡喜の念を漏らしたいと云ふ深き目的と動機とを有してをつた、同時に此愛の蓮の中にほのかに暖まりながら眺むる外圍に、塵に塗れ芥に埋もるが如き一般無自覺の人間を見て哀々の愍情を起し之等をも自身と同一の自覺にまで是非とも持ち來したいと云ふ深い目的と動機とから出發して來てゐる。ドストイエフスキーに又はトルストイに、此目的と此動機とはないかと云ふに、否ある。あるが淺い。淺いだけに作中此種の叙述は時々巨龍の片鱗として現れてゐるに過ぎない、無量壽經に至つては聖龍坤體を延べて之を見よと光り輝いてゐるのである。小説的記述のうちに深幽にして端嚴なる神の愛の眞相を説かんとするは、小説其ものが元來「暗示的に説くを原則とする」ものなる關係上古往今來行はれてゐる處である。否唯一の最も完全なる説述方法であるかも知れない。而して無量壽經の如き其最もよく説かれたるものゝ一つであらう。

小説無量壽經はやゝ難解のものであるから小説であるにもかゝはらず註解をつけねば青年子女にはわかり難いことになつてゐる。否青年子女ばかりではなく古來幾萬幾百萬の僧俗の學究も以て易解の書なりとは見てゐないけれども、事實そんなに六か敷

いものではないさゝか心を潜めて之を見れば眞相を極むる事はむしろ容易である。小説は事實小説であるが、此のドストイエフスキーの罪と罰の如きても露西亞に於て先輩は後輩に戒むるに、罪と罰は聖書であるから其つもりで寢ころんだりしないで端坐てもして讀まなければわからないと云ふて聞かす由であるから罪と罰以上深奥な る無量壽經はより愼重なる用意を以て讀まるべき要があらう。

古來印度、支那、朝鮮、日本の幾多の學僧が潜心して猶且つ寧ろ難解の書なりとした無量壽經をさまで難解てはないと云ふそもゝの根據は彼れは佛說無量壽經なりと見、我は小說無量壽經なりと見る處に於てわかれる、今は眞宗や淨土宗が根本經典なりとして尊崇し、事ある毎に佛前にて奉載勸誦する無量壽經は事實一の小說であつて後人が佛說になぞらへて作爲したものに決して間違はない。之は史蹟から云つて大乘經典は佛說に非ずとするは佛典の新研究者のほゞ一致して認むる處であつて、之に對して若干の異說なきにしも非ずであるが其異說も漸次影を潜めんとしつゝあるが現時の狀態である、しかも史蹟は如何あらうとも、大乘經典非佛說が根本的に破壞されてしまつても、無量壽經そのものゝ內容から云つて義理にも佛說であるとは認められないことは讀む人自ら之を覺るであらう。しかし無量壽經が佛說に非ずと事ふ事は大乘教の唯一の活躍國たる日本に於てすら極めて少數の佛教の新研究者の知り且つ主張してゐる處であつて、無數の否ほとんど佛教徒の全部は倘侶共に今猶佛の金言なれば其解釋は一字一句もいやしくもすべからずと膠着してゐる。佛の金言なる山大の石に躓いて一步も進めないのであるが此石だになければ足は餘程容易にはこび得るのである之れがさまで六か敷くないと云ふ事になる根源である。

然らば無量壽經は釋迦の直說でないとすれば夫れは大變である、釋迦の直說であると思へばこそ「南無阿彌陀佛」と云ふ不可思議千萬な事を稱へたら「極樂」と云ふ常識で考へられない、常識で考へたら當然嘘であるべき妙な處へも行けると信じてゐたのであるが今は大變な事になつたと云つた若き佛教信者があつた。其人の如きは葉末に置

く白露の如き危ない處に信仰をおいておつたものと云ふべく、釋迦であつてもキリストであつても、斯くある故に斯くなるとの說明をきいて得心した上でなければ安んじて信ずる事は出來ないではないか、其代り斯くある故斯くなると徹底して說くものあれば夫れは敢て釋迦てなくともキリストてなくとも安んじて信じてよい譯てある。今無量壽經の作者の如き偉大なる體驗者の言を信せずと云ふ者の如きは釋迦を信ずと云ふものよりも遙かに無謀なるものてあると云はねばならぬ。釋迦の說なるが故に尊いのてはなく其內容が尊まるに足るべきものを備へてゐるから尊いのてある。無量壽經が釋迦の直說でないからとて彼の述作は、其の眞の價値に微動だも及ぼすものではない。

斯くの如き偉大なる達識を有する無量壽經の作者が自己の名を其作に冠せなかつたのは專ら時代が然らしめたものと思はれる。即ち釋迦の言說は始め口授暗誦して傳へられてをつたものてある、即ち世襲の職業僧があつて一子相傳的に子孫に相傳へて來たものてあつた。夫れが紙本の上の文字に現れるに至つたのは釋迦滅後數百年後の事に屬するらしい、それまで記憶の不正確を防ぐ爲めに貝多羅葉や樺皮に部分的に書きつけてをつた職業僧もあつたらしい。無量壽經の如きは此口授暗誦的時代に生れたものてあると信ぜらるべき理由がある。而して之を子孫に傳ふべく「佛說」と冠題する事は絕對的必要なる條件てあつたと思はれる。即ち事實の佛說たる小乘の經典たる四阿含經や、法句經や、本生經の形式を踏まねばならなかつたのてあらう。

此人生は愛の一大調和體てある。詳しく云へば我々は現狀に於て、今こゝにこうしてゐる、こう云ふ境涯にゐる此現狀に於て最も幸福なのてある。其れが貧と、病弱の極端てあつても、霜夜の牢獄の中で無辜の罪に泣いてゐる時てあつても、夫れに今俄に魔術的に富と健康を加へることよりも、寒夜の牢舍から春光の金殿にうつされるよりも今の現在が最も宇宙より惠まれてゐるのてある、自己以外の全宇宙のすべて、若し神と云ふものが別個にあるものなれば其神の全愛、鬼と云ふものがあれば其鬼の

針ほどでも持つてゐるかも知れない愛の全部、否すべての存在の全愛が自分一人に注がれてゐる（親鸞は此事を如來は親鸞一人のために御苦勞ましましけりと云つてゐる）のが之は昭乎たる事實なのである。此事實を認める幸福に達せしむべく想を構へ考を練つて無量壽經なる偉大なる作物が現れたのである。今其內の一部分を抜き來つて「小說4等覺」と云ふ別名を與へて聊か釋註を附する次第である。

小說平等覺

佛、阿難に告げたまはく。乃往過去、久遠無量不可思議無央數劫に錠光如來、世に興出して、無量の衆生を敎化し、度脫し、皆道を得しめて、乃ち滅度を取りたまへり、次に如來ます。名づけて光遠といふ。次を月光と名づけ、次を栴檀香と名づけ、次を善山王と名づけ、次を須彌天冠と名づけ、次を須彌等曜と名づけ、次を月色と名づけ、次を正念と名づけ、次を無著と名づけ、次を龍天と名づけ、次を夜光と名づけ、次を離垢と名づけ、次を不動地と名づけ、次を安明頂と名づけ、次を瑠璃妙華と名づけ、次を瑠璃金色と名づけ、次を金藏と名づけ、次を燄光と名づけ、次を燄根と名づけ、次を月像と名づけ、次を地動と名づけ、次を日音と名づけ、次を解脫華と名づけ、次を莊嚴光明と名づけ、次を海覺神通と名づけ、次を水光と名づけ、

次を大香と名づけ、次を璃塵垢と名づけ、次を寶燄と名づけ、次を妙頂と名づけ、次を勇立と名づけ、次を功德持慧と名づけ、次を蔽日月光と名づけ、次を日月瑠璃光と名づけ、次を無上瑠璃光と名づけ、次を菩提華と名づけ、次を最上首と名づけ、次を月明と名づけ、次を日光と名づけ、次を華色王と名づけ、次を水月光と名づけ、次を除癡暝と名づけ、次を度蓋行と名づけ、次を善宿と名づけ、次を威神と名づけ、次を淨信と名づけ、次を法慧と名づけ、次を懸音と名づけ、次を師子音と名づけ、次に龍音と名づけ、次を處世と名づく、此くの如きの諸佛、皆悉く已に過ぎたまへり。

爾時、次に佛まします、世自在王、如來、應供、等正覺、明行足、善逝、世間解無上士調御丈夫、天人師、佛、世尊と名づけたてまつる。

【註】 物語りの始まりである。全く假空の想像による創作であるが、舊佛教徒は佛說に嘘妄なしなど、此のあたりから六か敷く解して行くから後に至つて解釋のつかぬ

ジレンマに陷るのである。世自在王如來と云ふ覺者の世にある時、其國の國王であつた人が出家して法藏と稱し、其覺者について修業すると云ふ第二段の物語に進めるまで興味を惹起せしむる用意から、此の五十三佛の世を前程に持ち來つたものであるが、此あたりは基督敎の舊約の行き方と甚だよく相似てゐるから、歷史的には基督敎より古く且つ舊約の發生地と佛敎の發生地とは僅かにアラビヤの砂漠を隔てて相接してゐるのであるから舊約は印度の方から其源となる何物かを輸入して來たのではないかとの想像說も生ぜられて來るのである。

【字意】 ○乃往 むかし。○無央數劫 盡くるなき長時間をいふ。○度脫 生死海を渡し煩惱を脫れしむること。救ふことをいふ。○滅度 覺りを開くこと。○世自在王 佛名、世饒王ともいふ。○如來 佛に十種の呼方がある。これを佛の十號といふ。如來はその第一である。眞如より來ると云ふ意。○應供 佛十號の第二。佛は人天の供養をうくべき資格あるゆゑ應供といふ。○等正覺 佛十號の第三。平等の正覺といふ意。○明行足 佛十號の第四。智明も修行も滿足せる人といふ意。○善逝 佛十號の第五。善く因より果に逝きて歸らぬといふ意で、再び迷はざる人をさす。○世間解 佛十號の第六。世のことに通じてゐるといふこゝろ。○無上士調御丈夫 佛十號の第七。無上尊く、一切衆生を調伏制御す士といふ意○天人師 佛十號の第八。天と人との師といふこゝろ。○佛 佛十號の第九、覺者の意。○世尊 佛十號の第十。世人の尊崇する

人と云ふ意。以上世自在王如來一人を斯く尊崇して十種に呼んで其偉大なる法師に對して先づ無限の崇敬を拂はんとした作者の用意である。

時に國王まし〳〵き。佛の說法を聞きて心に悅豫を懷き、尋ち無上正眞道の意を發し、國を棄て王を捐て、行じて沙門と作り、號して法藏と曰ひき、高才勇哲にして世と超異せり。世自在王如來の所に詣でて佛の足を稽首し、右に繞ること三帀して長跪し合掌して、頌を以て讚めて曰はく。

光顏巍々として威神極なくましまし
摩尼、珠光の燄耀も皆な悉く隱蔽せられて
に超えたまひて倫なし。正覺の大音は、響、十方に流る。戒聞、精進、三昧、智
慧、感德、侶なく、殊勝希有なり。深く諦に善く諸佛の法海を念じ深を窮め奧
を盡して、其の涯底を究む。無明と欲と怒と、世尊は永くましまさず。人雄師子、
神德無量なり。功勳廣大にして智慧深妙なり。光明威相、大千に震動す、願はく

は我れ作佛せば聖法王に齊しく、生死を過度して、解脫せざる靡からん。布施、調意、戒忍、精進、是くの如きの三昧と智慧とを、上れたりとせん吾誓ふ佛を得んに、普く此の願を行じて一切の恐懼の爲に大安を作さん。假使佛ましまして、多百千億萬無量の大聖、數恒沙の如くならんに、一切の斯等の諸佛を供養せんよりは、道を求めて、堅正にして、却かざらんには如じ。譬へば恒沙の如きの諸佛の世界、復計ふべからざる無數の刹土あらんに、光明悉く照して、此の諸〳〵の國に徧からん。是くの如く精進にして、威神量り難からん。我れ佛と成らんに、國土をして、第一ならしめん、其の衆奇妙にして、道場超絕し、國泥洹の如くにして、等雙なからん。我れ當に哀愍して、一切を度脫せん。十方より來生せんもの、心悅ばしく淸淨にして、已に我が國に到らば、快樂安穩ならん。幸くは佛、信明したまへ。是れ成が眞證なり、願を發して、彼において所欲を力精せん。十方の世尊、智慧無礙にまします。常に此尊をして、成が心行を知らしめん。假令身を諸〳〵の苦毒の中に止ると

も、我行は精進にして、忍んで終に悔ゐじ。

【註】國王が出家して僧となり、衆生のために修業すると云ふ物語の進行である。恰も我國に於て古へ天皇の入道し給へるを想起せしめる。世自在王如來の前に至りてする禮式は印度に行はれた最敬禮の形式である。長跪し合掌しの次に「頌」を以て讃めるあたり、人の德を歌詞を以て褒むるは今も昔もかはりないやり方と見へる。

【字意】○悅豫　よろこび。○無上正眞道意　佛の正覺の智慧を求める心を無上正眞道の意といふ。○沙門　出家の人のこと。○高才勇哲　才智すぐれ、勇ましく敏きこと。○超異　こえすぐれること。○稽首　頭を地につけて禮拜する。○三帀　は周。みめぐり。○頌　詩句を以て佛を褒める歌詞をさす。○燄明　光明に同じ。○摩尼　如意珠の梵音、これを持てるものゝ意に隨ひ、衣服財寶等を自在に出すといふ珠。○燄耀　ひかりかゞやくこと。○隱蔽　おほひかくす。○聚墨　墨のかたまり。○戒聞　六度の一。度は生死を度りこえる意。菩薩が生死の境界即ち迷の世界を度りこえるために勉める六種の修行を六度といふ。戒聞は其一で謂ゆる授戒のこと。こゝでは布施（法を說き施し財を與へ施すこと）、忍辱（堪へ忍ぶこと）の二度を持戒に攝めて略してある。○精進　六度の一。心を精まして道に進む。つとめはげむこと。世の所謂精進の

如く生物を食はぬのみを云ふのではない。○三昧　六度の一。禪を結び慮を凝し宇宙の眞理の發見につとめる。○智慧　六度の一。智慧を磨くこと。○法海　法の廣いことを海に喩へた語。○無明欲怒　舞明は智慧の明でない愚痴のこと、欲は貪欲、怒は瞋恚。○人雄師子　人中の雄者即ち佛のこと。○神德　神は不思議といふこゝろ。不思議の德と云ふ意。○威相　けだかきすがた。○大千　大千世界宇宙をさす。○聖法王　世自在王の事。大聖の法に自在を得たる人といふ意。○解脫　煩惱の繫縛を解き、迷の苦を脫るゝこと。覺ること。○調意　慳貪の意を調伏すること。○恒沙　印度の恒河(Garga)の沙といふ意で、無數といふ意を云ふ。○刹士　國といふこと。○道場　道を說く場所。○泥洹　無爲寂定の涅槃のこと。○等雙　くらべることをいふ。○信明　誠にして僞なきことを證明すること。○眞證　眞實の證據。○所欲　ねがふところ。○力精　力勵精勤。○此尊　これらの世尊。○心行　心の行きねがふこと。こゝろざし。

佛、阿難に告げたまはく。法藏比丘、此の頌を說き已りて、佛に白して言さく。唯然なり世尊、我れ無上正覺の心を發せり、願くは佛、我がために廣く經法を宣べたまへわれ當に修行して。佛國を攝取し、淸淨に無量の妙土を莊嚴すべし。われをして世に於いて、速に正覺を成り、もろ〳〵の生死勤苦の本を拔かしめたまへ。

佛、阿難に語りたまはく、時に世饒王佛、法藏比丘に告げたまはく、修せんところの行、莊嚴の佛土の如きは、汝自ら當に知るべしと。

比丘、佛に白さく、斯義弘深にして我が境界にあらず。唯願くは世尊、廣くために諸佛如來の淨土の行を敷演したまへ。我これを、聞き已りて、當に說の行く修行して所願を成滿すべしと。

爾時、世自在王佛、其の高明にして、志願の深廣なるを知ろしめし、即ち法藏比丘のために、而も經を說きて言はく、譬へば大海を一人升量せんに、劫數を經歷して尙ほ底を窮めて、妙寶を得べきが如し。人心を至し、精進して道を求めて止ざることあれば、會當に剋果すべし。何の願か得ざらんと、是において世自在王佛、卽ち爲めに廣く二百一十億の諸佛刹土の天人の善惡、國土の麁妙を說きて其の心願に應じて、悉く現じてこれを與へたまふ。

時に彼の比丘、佛の說くところの嚴淨の國土を聞きて、皆悉く覩見して、無上殊勝の願を超發せり、其の心寂靜にして、志著する所なく、一切の世間に、能く及ぶ者なし。五劫を具足して、佛國を莊嚴すべき淸淨の行を思惟し攝取す。

阿難、佛に白さく。彼佛の國土の壽量幾ぞや。佛言はく。其の佛の壽命は、四十二劫なりき。

時に法藏比丘　二百一十億の諸佛妙土の淸淨の行を攝取したまひき。是くのごとく修し已りて、彼の佛の所に詣て、稽首して足を禮し、佛を繞ること三帀し合掌して住り佛に白して言さく。世尊、我已に佛土を莊嚴すべき淸淨の行を攝取しつと。

佛、比丘に告げたまはく。汝いま說くべし、宜しく知るべし、是れ時なり。一切の大衆を發起して悅可せしめよ。菩薩聞き已りて、此の法を修行して緣りて無量の大願を滿足することを致さんと。比丘、佛に白さく。唯聽察を垂れ給へ、我所願の如く當に具に之を說くべし。

【註】　國王が出家して、法藏と云ふ僧となり、世自在王佛の前にて其如來の德を褒め

一轉して自己も亦其如來の如くならんと誓ひ進んて一切の生類をも救はざるべからずと云ふ様に物語が急に進行して來る。ついて我れは我れ自身佛となり進んて一切衆生をして佛たる覺を開かしめんと欲するが如何にすればよろしいか。即ち修業の方法は如何、而して如何なる狀態たらしめ得たらば衆生は滿足すべきかと云ふ様に徐々に說かんとする眞目的に觸れ始めて來てゐる。こゝに作者の用意として法藏が如何すればよいかと尋ねると、いや夫れは汝自ら考へよなどゝ云ふ問答を挿入してある、之れ別段大なる意味があるわけではないことは云ふまでもない。

法藏は世自在王如來から無數の佛國を見せて貰つて其の長を取り短をすてゝ最も完全なる最も滿足すべき佛國即ち淨土は斯の如きものたらざるべからずとの理想を立て、夫から其理想を達成すべき様修業をすゝめて行くと云ふ様な說話の順序にしてあるが。之は現在の此の圓滿に調和してゐる宇宙が如何なる理由又は經過或は修業（誰かの）によつてなされたか、完成されなか人智の推測の限りではないが此宇宙は

佛國即ち淨土に出來上つてゐる、之は不思議なものだと云ふた處て容易に人々が同意して呉れない。何處が完全なる淨土に出來てゐるかと責めて來る、酒や煙草の味ても言葉ては說明し惡い、心境の底まて發達してゐない者に宇宙の愛に對する自分の味ひ加減はこう〳〵だと口で說明しても分からない。作者の苦心はこゝにある。以下において法藏は如何なる願をたてたか、即ち最も滿足すべき淨土の狀態はいかなるものかを作者當時の印度の社會狀態から割り出して所謂四十八願なる願をたてゐる。此現在の世界は滿足すべきものてある、之れこそ完全無缺なものてあるが併し當時四姓の別あつて最下は露國の解放以前の農奴又は奴隸の如き生活をしてゐる者にお前こそ幸福てあると說いてきかしても到底夫れを受け入れない、斯く〳〵のわけあひてあるからお前こそ幸福であるとさとしても其れを正當に解し得るだけに智力が發達してゐない。夫れよりも以下に擧げる様な四十八願の達成され、そんな能力、自由、狀態に一足飛びに飛び込み得る様な國へ、往けるぞよとの說明の方

がはるかに耳に入り安い、否、之れてないと耳にはいらない。而して之が信じ得られ、未來にそんな滿足な國へ行つて住むことが出來ると、未來を樂しみ、現在に滿足し、佛に感謝してゐる心理狀態は現在を最も正しく見て、現在が最も惠まれてゐるのである、宇宙の絶大の愛の中に生きてゐるのであるといふ正當な神の愛の受け入れられた心理狀態とほゞ同一狀態であるから、智力未開のものをも此の狀態たらしめんための之は作者の苦慮の存する處である。

【字意】○攝取　物事を攝ぶに劣をすて勝をとること。○莊嚴　嚴かなるかざり。○勤苦　なやみくるしみ。○世饒王佛　世自在王佛のこと。饒は饒益で、世を利益する王といふ意。○境界　身分。○敷演　のべひろげること。○高明　尋常に超え勝れて尊きこと。○升　昇　升にてはかる。○剋果　剋は成。なしはたす。○嚴淨　おごそかにしてきよきこと。○觀見　みること。○著　執著。○思惟　おもひめぐらすこと。○悅可　よろこぶこと。○聽察　遊ぶところを聽き、思ふところを察すること。

設我、佛を得たらんに、國に地獄、餓鬼、畜生あらば正覺をとらじ。

設我、佛を得たらんに、國の中の人天、壽終りての後、復三惡道にかへらば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、國の中の人天、悉く眞金色ならずんば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、國の中の人天、形色同じからずして、好醜あらば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、國の中の人天、宿命を識らず、下、百千億那由他の諸劫の事を知らざるに至らば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、國の中の人天、天眼を得ず、下、百千億那由他の諸佛の國を見ざるに至らば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、國の中の人天、天耳を得ず、下、百千億那由他の諸佛の所說を聞きて、悉く受持せざるに至らば、正覺を取らじ。

【註】以上は四十八願中の七願である。常安常樂を欲する事は、古今を通じての人情であり、神通力などに特殊の興味を持つは文化未開の人類又は幼稚なる人間の普遍

性であらう。右七願のうち第三願の國の中の人天悉く眞金色ならずんば正覺をとらじ、即ち我れ我が淨土を完成するからには國人は皆眞金色に光る身體を持つべしと云ふ理想は我々にはいさゝか解し能はぬ處であるが、當時の印度人は金色を尊んだものである。他國と交通してゐないから黄色人種又は白色人種のあるのを知らない人間と云ふものは皆黒色のものであると思つてゐる、其黒色にいさゝか光澤を帶んで紫黒色に見へる肌を持つたものが尊まれて、之れを紫金色などゝ稱せられてゐつたから、其紫金色以上に眞金色を崇む思想をこゝに持つて來たものである。

【字意】 ○地獄　地下にある獄といふ意である。○餓鬼　常に饑餓に苦しむ鬼といふ意。○畜生　他の爲に畜へ養はるゝ牛類といふ意。○人天　地球上の人と天上の人。○宿命　六神通の第一。宿は宿世、命は壽命で、自他の昔を知りとほすこと。○下至　乃至に同じ。○那由他　考へることのできぬほどの數。○天眼　六神通の第二。自在に一切をみる通力をいふ。○天耳　六神通の第三。自在に一切の言語音聲をきゝうる通力。○受持　うけたもつ。忘れぬこと。

設我、佛を得たらんに、國の中の人天、他心を見るの智を得ず、下、百千億那由他の諸佛の國の中の衆生の心念を知らざるに至らば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、國の中の人天、神足を得ずして、一念の頃において、下、百千億那由他の諸佛の國を超過すること能はざるに至らば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、國の中の人天、若し想念を起して身を貪計せば、正覺をとらじ。

設我、佛を得たらんに、國の中の人天、定聚にも住し、必ず滅度に至らずんば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、光明よく限量ありて、下、百千億那由他の諸佛の國を照さざるに至らば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、壽命よく限量ありて、下、百千億那由他劫に至らば、正覺を取らじ。

【註】 右は第八願より第十三願に至る、此内第十一願は此世界を去れば、生死をはな

れて常樂常安の極樂の國人となるべし、生ある故に死あり、生なく死なき境涯に生るべし、此世の生にある間は、死後極樂國人たる定まりたる運命の人にてあるべしと云ふ願て重要なる理想てあるが、一體に此四十八願なるものは順序が正しくない様に思はれる、或は易より難にとか、輕微なるものより重要なるものにとか、總論的のものから各論的のものとかに配列さるべきものかと思はれるのであるが一體に其順序には何等の考慮が拂はれてない様てある。之れ或は貝多羅葉などに一願々々書きつけて、おつたのを紙本にする時に順序が轉動したのではあるまいか。

【字意】○見他心智　六神通の第四。自在に他人の心持を見る通力。○神足　六神通の第五。自在に飛行し得る通力。○貪計　貪愛計度で執着していろ〳〵計ひをすること。○定聚　正定聚の略。佛となるに定れる聚といふ意。

設我、佛を得たらんに、國の中の聲聞よく、計量ありて、下、三千大千世界の聲聞緣覺、百千劫において悉く共に計校して、其數を知るに至らば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、國の中の人天、壽命よく、限量なからん、其の本願により修短自在ならんをば除く。若し爾らずんば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、國の中の人天、乃至不善の名ありと聞かば、正覺を取らじ

設我、佛を得たらんに、十方世界の無量の諸佛、悉く咨嗟して我名を稱せずんば正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、十方の衆生、心を至し、信樂して、我國に生れんと欲うて乃至十念せん。若し生れずんば正覺を取らじ。唯、五逆と正法を誹謗せんをば除く。

【註】以上は第十四願乃至第十八願。其内第十四願は聲聞又は、緣覺との稱を與へらるべき小乘の修業者、聲聞は師の教を受け十二支因緣の理法を覺る者、緣覺は師によらず自己の工風を以て十二支因緣を覺るものて、どちらにしても自己の覺を完成し阿羅漢の尊稱を與へらるべき法界の大家であるが此大家は釋迦の弟子中にも極めて數が少なく、既に此無量壽經の生れる當時は傳說化され神視されて餘程尊まれて

おつたものと見へて斯くの如き大法師の數へきれない無限數がおつて其國を飾つてあるべしと云ふ一の誓願に加へられてあるのである。

第十八願は此四十八願中最も重要なものとせられてある。即ち法藏が建設した理想の世界に入る條件をこゝに述べたものであるから最も貴重なる願として眞宗などでは王本願と稱してゐる。之を親鸞は

彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をば遂ぐるなりと信じて念佛まうさんとおもひたつ心のおこるときすなはち攝取不捨（おさめとりてすてず）の利益にあづけしめたまうなり。

と解してゐる。文字の上より見れば、皆のものが眞心で信じ求めて我國（極樂）に生れんと思ふこと、一念乃至十念すれば我國に生れしむべしと解する外はない。十念と云ふことが念佛（ナムアミダブツ）であると解するより、十思ひてある乃至がその上についてゐるから一思ひ乃至十思ひであると解する方が文字の解釋としてはより正しいものと思はれる、親鸞の解釋に至つてはあまりに奔放自在である。奔放自在であるも道理、親鸞は、此第十八願の文字によらずに極樂往生の正しい道たる自己の自覺を作り來つて會々文字の根據をこの第十八願に求めたにすぎないから、第十八願の解釋としては隨分無理な解釋であるが、無量壽經の作者と協力して無量壽經の作者が云はんとして言ひ得なかつた事を別の言葉を以て云ひ現せるは親鸞の功である。

別に何處かに安樂極まる世界がぽかりと宇宙の間に浮いてゐて、我々が今日其世界へ生れたいと思つて、此世界にゐる間に一聲か十聲かナムアミダブツと口で云つておくと死後魂が其世界へ生れることが出來ると云ふ樣なことはあり得べき筈はない。

親鸞の云ふ樣に、法藏の不思議なる誓願がある、其誓願にたすけられて極樂と云ふ國へ往生出來るのぢやと思つて、あはや一聲ナムアミダブツと稱へようと思ふと、

未だとなへざるに先立つて突として極樂へ行くべき條件成立するのだと云ふ左樣なことのあり得べき道理はない。

無量壽經の作者の希望は、斯くて偉大なる法藏の愛を歡喜する精神狀態に導きたい、法藏の愛を信ずる精神狀態は宇宙の愛を自覺したのと質に於てほゞ同一であると斷じて斯くの如き大膽なる物語を編み出し來つたのである。

親鸞は今日發達してゐる科學の頭がなくも、極樂說は信ぜざるを得ぬ、即ち經典の文字と妥協しながらも其天賦の鋭い觀察力と深刻な思索力から來て「如來は親鸞ひとりのために御苦勞ましましけり」—全宇宙は自分一人のために存在しゐる—の法喜を味はざるを得なかつたのである。法藏の物語を往昔に實在した事實と見ぬわけに行かぬ佛典に對する敬虔を以てして

「自然といふは、自はものづからといふ、行者のはからひにあらず。然といふはしからしむるといふことばなり、しからしむといふは行者のはからひにあらず、如來のちからひにてあるがゆへに法爾（ほうに）（法がしからしむ）といふ。」

と不思議にも、うまいからくりになつてゐる此まゝの現狀の幸福に滿悅せざるを得なかつたのである。

念佛と信仰との關係は左の說明によればわからうか

米國の東部の某湖では、汽車がこちらの岸に達すると、そこには船の上に軌條を敷いた汽船が待つておつて、列車は汽關車諸共乘客をのせたまゝ其船の上を進行する、列車が乘り終ると船は岸をはなれて對岸に達することになつてゐる。

此場合は乘客は汽車に渡されたのか、汽船に渡されたのか、乘客が書物でも讀んでおつて窓外を見なかつたら全く汽車にのつておつたら彼岸についたと思ふであらう汽車は念佛である汽船は信仰である。湖を渡るのは船てないとわたれない。極樂へ行けると信仰する、さあ何時死んても淋しい恐い前途ではないが、法藏の立てた條件によつて念佛を稱へたら云ふものがもとよりあるわけはない。

くて明るい樂しい極樂だと思ひ信ずることが出來る、夫れは幸福である、其の幸福狀態に達せしむるものは一に心の信仰である、心がさう信ずるからである。處が唯信じたけでもよいが、唯信ずるてはどうもつかまり處がなくてたよりない、願を立てるときに第一次的に唯信じたただけで極樂へ往生出來るといふ風の條件にしておいて足るのであるが、夫れよりも念佛を稱へたら極樂へ往生出來ると信ずると第二次的につかまり處をこさへた、彼岸にわたれるのは同じことてある、乘客は汽車にのり又汽船にのつて二重になつて彼岸へわたるが、汽車はなくても汽船だけで渡ればわたれるのであるが、乘り心地のよい汽車にのつたまゝ乘りかへをせず樂にひとりてに彼岸にわたれる樣な設備になつてゐるのてある。此意味に於て念佛なる方法は多大の苦心を拂はれて案出せられた方法てあつて、出來たあとから考ふればなるほど甘く出來てゐるなあ位であるが無量壽經の作者の偉大なる工風の力を示してゐるものと思ふ。（因に云ふ。かるが故に現在の老人には唯念佛をすゝめよ。）

親鸞は夙に此點を觀破して、念佛を稱へないてもよい助けられるのだと信じて、となへようかと思つたら夫れだけでよいと斷として決定的に解釋してゐる。

【字意】○計校　はかり考へること。○修短　長短。○不善名　よからざる名。○吝嗟　吝は讒。嗟は嘆。○我名　眞宗では南無とは歸命渇仰の意。○稱　稱揚。ほめあげること。○至心　眞實の心。○信樂　疑なく信じて歡喜愛樂する心。○欲生　淨土に往生したいとねがひもとめること。○乃至十念　文字の上から云へば彼の國に往生したいと念ふ念ひが一念ひ乃至十念ひと解せればならぬが往生したいと欲する念慮の作つた南無阿彌陀佛の口稱の念佛をさすと眞宗では解してゐるが決して無理な解釋ではないと思ふ。○若不生者　若し淨土へ往生することが出來ぬならばといふ意。○五逆　恩に違ひ福德に逆ふ五種の大罪惡。（一）小乘の五逆は、殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧（僧侶の和合を妨ぐること）出佛身血の事。（二）大乘の五逆は、一は塔を壞し經藏を燒き三寶の財物を盜むこと、二は三乘法を謗り聖教を粗末にすること、三は僧侶を罵り責め使ふこと、四は小乘の五逆罪に同じ、五は因果の道理を信ぜず、惡口、邪婬等の十不善業をなすことな言。○誹謗正法　佛なしといひ、佛の

教法をそしること無神論などは此誹謗正法に入るべきもの。

設我、佛を得たらんに、十方の衆生、菩提心を發し、諸〻の功德を修め、心を至し願を發して、我國に生れんと欲はん、壽終るときに臨みて、假令、大衆と圍繞して、其人の前に現ぜずんば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、十方の衆生、我が名號を聞きて念を我國に係け、諸〻の德本を植ゑ、心を至し廻向して、我國に生れんと思はんに、果遂せずんば正覺を取らじ

設我、佛を得たらんに、國の中の人夫、悉く三十二大人想を成滿せずんば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、他方の佛土の諸〻の菩薩衆、我國に來生して究竟して必ず一生補處に至らしめん。其の本願の自在の所化衆生のための故に。弘誓の鎧を被て、德本を積累し、一切を度脫し、諸佛の國を遊んで菩薩の行を修し、十方の諸佛如來を供養し、恒沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立てしめんをば除かん。常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の德を修習せん。若し爾らずんば正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、國の中の菩薩、佛の神力を承けて諸佛を供養し、一食の頃に徧く無數無量那由他の諸佛の國に至ること能はずんば正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、國の中の菩薩、諸佛の前にありて其の德本を現さんに諸〻の欲求せんところの供養の具、若し意の如くならずんば、正覺を取らじ。

【註】第十八願の主要點は彼國即ち極樂に生れんと願ふものをして、生れしめんと云ふ法藏の願の力にすがるものを助けんと云ふ處にある、すがる心の徹底してゐるもの、念佛を稱へんものを助けんと云ふ條件の提出者兼其力の把持者たる彌陀（法藏が自己の誓願を果すだけの修業をした曉換言すれば理想した極樂を建設しおはり自己も亦覺を開いた時に法藏佛と云はすして彌陀佛と云ふ樣に名を變へたもの）を信じ、何たる有がたき提言ぞやと歡喜肝に命じてあはや一聲其の至高の念佛を稱へんと思い立つた時に、最早條件に當ては

まり死後極樂へ往生出來る身分となると云ふことを信ずるもの丶信仰そのものに肝要をおかれたものである。それとて繰り返へして云ふ樣であるが信じないまへまでは、若し信じないで死んだら極樂へ生れず信じてのち死んだら極樂へ生れる。信ずると云ふ精神上の一作爲があるがために、物質的の非常なる惠を受けると云ふが如きは決してあり得べきことではないのであつて、之によつて死後は極樂へ生れることが出來るかや、有がたや〳〵と未來に滿悅し。明日汝は現金を百萬圓與へんと云はれたものが、未だ與へられてゐないが或る歡喜の心を懷いて明日を待つ樣な工合に、或る歡喜を懷いて未來を待つと云ふ現在の幸福をも味はしめんとする用意に外ならぬ。現實に此宇宙の愛を、先きに上げた緣覺式に師によらずよく觀察して之を認め又は聲聞に先哲の敎により之を信じ、又緣覺聲聞兩式を合せて古哲の言にもきゝ、自己も亦よく觀察靜慮して今現在宇宙の全愛につゝまれてゐるとの曉の光に觸れた覺者の眞實の愛の感謝とはゞ同一の幸福を味はしめんとする用意に外ならぬ。而して之は要するに他力を認め、他力の愛に安んずるのである、第十八願の主點はこゝにある。

處がこゝにあぐる第十九願及第二十願に至つては、自己の根機によつて宇宙の愛の體驗が出來ず、さればとて法藏菩薩談の如き巧妙なる喩話を信ずることによつても其の味を味ふ事の出來ない、聖と愚との中間にゐる者に向つて、其頑固なる中間者が多くは理論の上から因果の理法を信じ、善因によつて善果を得んとする傾向あるに乘じて善行をすゝめ德業をはげましめ、其德業には德業相當の報酬があるべきに、之れが倍加され、千倍加されて極樂に往生することを得るまでの結果を得べし斯くして勞動者が稼ぎためた大金を前にして味ふが如き喜悅の滿悅を味はしめんとせる用意であると思ふ。

大金は幽明を異にすれば最早賴むに足らぬが天地の間に植ゑつけた善業德業はいづれの地に於ても其結びたる果實を獲ることが出來る安慰を得せしめんとせるの

である。エネルギーは誠に不滅である。明治維新の元勲たる本戸公は死後の報と云ふことはあるかも知れん、どうしても雨が降りさうであれば傘を持つて出たら間違ひはないようにあるものとして務めておくがよからうと云つておつた由であるが第二十三、第二十四願の如きは之等の人を奨勵するに効がある。

佛の供養と云ふことを經典が力説するは供養は乞食を職とする僧家の常に念頭をはなるゝ能はざる處て自己が供養されることによつて供養者に呈する感謝の大なるを思ふにつけ此の第二十三、第二十四願の如きを極樂の條件中に數ふるに至つたものと思はれる。

【字意】○菩提心　佛の正覺の智慧をいふのである。又上はこの菩提を求め、下は衆生を化益したいと思ふ心をいふ。○諸功德　戒定慧の三學、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六度、の行又はいろ〳〵の善根。○名號　南無阿彌陀佛。○係念我國　淨土を慕ふこと。○德本。勝れた結果を得べき本因となる功德といふ意

○廻向　功德を淨土に廻向る、原因を結果に向ける。○果遂　はたしとげること。目的を達すること。○三十二大人相　大人とは佛のこと。三十二種の佛の相好を三十二大人相といふ。足安平（足底の肉滿ちて平なこと）千輻輪（足底の紋が千の輻輪の如きこと）手指纖長、手足柔軟、手足縵網（手足の指の中間に縵網の紋あること）足跟滿足、足趺高好、腨如二鹿王一（ふくらぎのこまやかなこと）手過レ膝（手の長いこと）馬陰藏（陰部のかくれたること）身縱高（身のたてよこのとゝのへる事）毛孔生二青色一（青色の毛あること）身毛上靡（毛が上になびけること）身金色、身光面各一丈（身の光明各一丈をてらす）皮膚細滑、七處平滿、兩手、兩足下、兩肩、頂中の平なこと）兩腋滿（左右の腋くぼまぬこと）身如二獅子一（威儀のとゝのへること）身端嚴（同上）肩圓滿、四十齒、齒白齊密、四牙白淨、頰車如二獅子一（兩頰の肉滿ちて隆きこと）咽中津液得二上味一（津液の美味なること）廣長舌、梵音深遠肉高く馨の如きもの）を三十二相と云ふ。○究竟　きはめること。○一生補處　一生過ぐれば佛處を補ふべき等覺の位をいふ。菩薩には五十二段（十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺）の位があつて、等覺の位は、その一生が終れば直に妙覺の佛になるのであるから其位を一生補處といふのである。○弘誓鎧　衆生を濟度しやうといふ弘き誓の堅固なこと。○自在所化　自在に化益すること。○引

さな鎧に喩へた語。〇積累德本　三學六度等の功德を積み累れること。〇度脫　生死海を渡し煩惱を脫れしめること。〇階倫　つれなみのともがら。〇諸地之行　十地の菩薩の修行。

設我、佛を得たらんに、國の中の菩薩、一切の智を演說すること能はずんば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、國の中の菩薩、金剛那羅延の身を得ずんば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、國の中の人天一切の萬物、嚴淨光麗にして形色殊特ならん、窮微極妙にして能く稱量することなけん。其の諸〳〵の衆生、乃至天眼を逮得せん能く明了に其の名數を辨ふること有らば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、國の中の菩薩、乃至少功德の者、その道場樹に無量の光色ありて、高さ四百萬里なるを知見すること能はずんば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、國の中の菩薩、若し經法を受讀し、諷誦持說して辨才智慧を得ずんば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに國の中の菩薩の智慧辨才、若し限量すべくんば正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、國土清淨にして、皆な悉く〳〵十方一切の無量無數不可思議の諸佛世界を照見せんこと、猶し明鏡に其の面像を睹るが如し、若し爾らずんば正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、地より已上、虛空に至るまで、宮殿樓觀、池流華樹、國の中のあらゆる一切の萬物、皆な無量の雜寶、百千種の香を以て、而も共に合成せん。嚴飾奇妙にして諸〳〵の人天に超えん、其香あまねく十方世界に薰せん、菩薩聞かんもの皆な佛行を修せん。若し是の如くならずんば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、我が光明を蒙りて其身に觸れんもの、身心柔輭にして人天に超過せん。若し爾らずんば正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、我が名字を聞き

て、菩薩の無生法忍、諸〳〵の深總持を得ずんば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界に、それ女人ありて我が名字を聞き、歡喜信樂し、菩薩心を發して女身を厭惡せん。壽終りての後、復た女像とならば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界の諸〳〵の菩薩衆、我が名字を聞き、壽終りての後、常に梵行を修めて佛道をなるに至らん。若し爾らずんば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界の諸天人民、我が名號を聞きて五體を地に投げ稽首作禮し、歡喜信樂して、菩薩の行を修めんに、諸天世人、敬を致さずといふことなけん。若し爾らずんば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、國の中の人天、衣服を得んと欲はゞ、念に隨ひて即ち至らん。佛の讃むるところの應法の妙服の如く、自然に身に在らん、若し裁縫、擣染浣濯することあらば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、國の中の菩薩、意に隨ひて十方無量の嚴淨の佛土を見んと欲はんに、時に應じ、願の如く寶樹の中において皆悉く照見せんこと、猶ほ妙鏡に其の面像を覩るが如くならん。若し爾らずんば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、他方國土の諸〳〵の菩薩衆、我が名字を聞きて佛を得んに至るまで、諸根闕陋して具足せずんば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、他方國土の諸〳〵の菩薩衆、我が名字を聞きて、皆悉く清淨解脫三昧を逮得せん。是の三昧に住して、一たび意を發さん頃に、無量不可思議の諸佛世尊を供養したてまつりて、而も定意を失はじ。若し爾らずんば、正覺を取らじ

【註】此あたり作者は、繰り返へし巻きかへし完全を期してゐる、偉大なる想像力を

還ふしてゐる。此内第三十五願の女身を厭惡せんもの再び女像と生らしめずとの希望は全く印度の風習が極端に女子を輕侮し邪魔物又は有害物として取扱つた習慣に從つて女子も死後完全なる男子となるべしと云ふ希望を加へたものである、釋迦の如きも女人を極端に警戒し、始めは僧團に女人の入ることを絶對に許さなかつた、之一は男僧の修業を妨ぐる結果を來すを恐れたのであるが一つは女人輕侮の先入主も幾分原因してゐる、後に比丘尼團を造つて女人の出家を許したがそれとて彼女等を慈愛するうちにも時々知らず〳〵釋迦の口からすら由來輕蔑するべきもの女人と云ふ様な意味の言葉が出てゐるから見ても女人を輕侮する思想は石の如く牢固として當時の社會からは拔けなかつたものと思はれる。

【字解】○金剛那羅延身　堅き金剛のやうな天の力子の身さいふこと。○嚴淨光麗　けだかく、きよく、はなやかなこと。○形色殊特　いろかたちの勝れたること。○稱量　はかりしること。○遂得　遂は及で得つくすこと。○道場樹　佛樹に同じ。○受讀心受　心に受け、口に讀む。○諷誦諮　諮をつけて暗誦すること。○持說　心に義理を持ちて忘れず、また他人に說くこと。○樓觀望臺　觀望臺、○無生法忍　無生法とは眞如の理のこと。眞如の理は本來不生不滅の法であるから無生法といふ。忍は忍可決定で心にさとること。それで無生法忍とは、智慧を以て眞如の理をさとることである。○總持種々の義理を有せる呪文のこと。○歡喜信樂　信心歡喜。信じてよろこぶこと。○梵行　清淨なおこなひ。○五體投地　五體は兩手、兩足、頭をいふ。全身を地に投げ伏すこと。○菩薩行禮拜（佛をおがむこと）讃嘆（佛をほめること）作願（往生の願を起すこと）觀察（淨土を思ひ浮べること）廻向（思を淨土に向けること）の五念門の行をいふ。○應法妙服　佛の定められた法則にかなうた製裁。○擣染說淨　擣はうちたゝくといふ語で、物を白く晒すこと。染は色々にそめること。說淨は洗淨すること。○漏盡比丘　羅漢のこと。○闕陷　闕減醜陋。かけたるとみにくい。○淸淨解脫三昧　すべての繫縛を離れた定のこと。一發意頃　一念の頃極めて短い時間。

設我、佛を得たらんに、他方國土の諸〳〵の菩薩衆、我が名字を聞きて壽終りての後尊貴の家に生れん。若し爾らずんば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、他方國土の諸〳〵の菩薩衆、我が名字を聞きて、歡喜踊躍して菩薩の行を修め、德本を具足せん。若し爾らずんば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、他方の國土の諸〳〵の菩薩衆、我が名字を聞きて皆な悉く普等三昧を逮得せん。此の三昧に住して成佛に至るまで、常に無量不可思議の一切諸佛を見たてまつらん。若し爾からずんば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、國の中の菩薩、其の志願に隨ひて、聞かんと欲はんところの法、自然に聞くことを得ん。若し爾らずんば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、他方國土の諸〳〵の菩薩衆、我が名字を聞きて、即ち不退轉に至ることを得ずんば、正覺を取らじ。

設我、佛を得たらんに、他方國土の諸〳〵の菩薩衆、我が名字を聞きて、即ち第一、第二、第三法忍に至るを得ず、諸佛の法に於いて即ち不退轉を得ること能はずんば、正覺を取らじ。

佛、阿難に告げたまはく。爾時に法藏比丘、此願を說き已りて、頌を說きて曰く。

我れ超世の願を建て、必ず無上道に至らじ。我れ無量劫において、大施主となりて、普く諸〳〵の貧窮を濟はずんば、誓ふ、正覺をならじ。我れ佛道なるに至つて、名聲十方に超えん。究竟して聞ゆるところなくんば、誓ふ、正覺をならじ。

離欲と深正念と淨慧との梵行を修して無上道を志求し、諸〳〵の天人の師とならん神力、大光を演べて普く無際の土を照し、三垢の冥を消除して廣く衆〳〵の厄難を濟はん。彼の智慧の眼を開きて、此の昏盲の闇を滅せん。諸〳〵の惡道を閉塞して、善趣の門を通達せん。功祚成滿足して威曜十方に朗ならん。日月重暉を戢めて、天の光も隱れて現れず。衆のために法藏を開きて廣く功德の寶を施さん。常に大衆の中に於いて法を說きて獅子吼せん。一切の佛を供養したてまつり、衆〳〵の德本を具足せん。願慧こと〳〵く成滿して、三界の雄たることを得ん。佛の無礙智の如く

通達して照さゝることなからん。願くば我が功德の力、此の最勝の尊に等しからん斯願もし尅果すべくんば、大千感動すべし。虛空の諸〳〵の天人、當に珍妙の華を雨すべし。

【註】以上にて四十八願全部を終る。願の趣旨には隨分重複したるもの、願と願との間に矛盾の存すること等認められる、けれども之は法律ではなく且つ講說でもなく小說であるからそれ位の事は解者も大膽に會通して可なりてあらう。兎にも角にも願の數を四十八個に滿しめんといろ〳〵無理をしたあとがある、之は印度では由來多數又は完全を現すに八萬四千又は四十八等の數を用ふる慣習があるから完全を現すべく四十八の數まで數へて來たのであるが今日の文化から想像說を立つれば未だ〳〵希望は不足してゐる樣に思ふ。最後に頌即ち歌詞を以て此誓を總括的に繰り返へし此意味を添加してあることは作者の文藝上の用意てある。

【字意】○歡喜踊躍　よろこびて天に踊り地に躍ること。○菩薩行　六度の修行のこと。○德本　諸功德のこと。○普等三昧　普遍平等といふ意、三昧は定である。無量の諸佛を一時に普く見たてまつる禪定のこと。○不退轉　既に得た功德が轉じ退くことのない位を不退轉位といふ。○第一第二第三法忍　音響忍、柔順忍、無生法忍のこと。忍は忍可決定で、確に思ひ定めたことをいふ。音響忍とは佛菩薩の敎（音聲）によつて眞理をさとつたこと。柔順忍とは眞理に柔しく順つて更らに背かぬこと。無生法忍とは不生不滅の眞理をのこらずみさめて心の動かぬこと。○諸佛法　諸佛のさとり結へる法。○超世　世に超え勝れること。○無上道　この上なき道、佛果のこと。○貧窮　智慧も能力もまづしいものをいふ。○離欲　欲をはなれること。○深正念　ふかき禪定。○無際土　無邊際の國土。はてなき世界。○三垢　三毒に同じ。貪欲、瞋恚、愚痴。○昏盲　くらきこと。○諸惡道　地獄、餓鬼、畜生の三惡道。○善趣　修羅、人、天の三善道。○功祚　功德のくらゐ。○法藏　功德法を藏めてをる名號のこと。○獅子吼　佛の說法を獅子王の吼え立てゝ百獸恐れ隨ふ喩へた語。○德本　功德善根。○願慧　修業前の願と修業後の智慧。○三界雄　欲界、色界、無色界の雄者。○無礙智　さゆることなき智慧。○最勝尊　最もすぐれたる尊者、佛。○尅果　必ずはたしときげる。○大千　大千世界宇宙をさす。

佛、阿難に告げたまはく、法藏比丘、此頌を說き已るに、時に應じて普く地六種に震動し、天より妙華を雨して以て其上に散ず。自然の音樂、空の中にて讃めて曰く、波定して必ず無上正覺をなるべしと。こゝに法藏比丘、是の如き大願を具足し修滿し誠諦にして虛しからず、世間に超出して深く寂滅を樂ふ。

阿難よ。時に彼の比丘、其の佛の所、諸天、魔梵、龍神、八部大衆の中において、斯の弘誓を發し、此の願を建て、已りて一向に志を專にして妙土を莊嚴す。修するところの佛國、恢廓廣大にして超勝獨妙なり、建立常然にして衰變なく、不可思議兆載永劫において菩薩の無量の德行を積植したまふ。

欲覺、瞋覺、害覺を生せず、欲想瞋想害想を起さず、色聲香味觸法に著せず、忍力成就して衆苦を計らず、少欲知足にして染恚癡なし。三昧常寂にして智慧無礙なり虛僞諂曲の心なく、和顏愛語にして意に先んじて承問したまふ。勇猛精進にして志願倦むことなく、專ら淸白の法を求めて以て群生を惠利したまひき。

三寶を恭敬し、師長に奉事したまふ。大莊嚴を以て諸〳〵の行を具足し、諸〳〵の衆生をして功德を成就せしめたまふ。空無相無願の法に住して、作なく起なく、法は化の如しと觀じ給へり。麤言の自害と害彼と彼此俱に害するを遠離して、善語の自利と利人と人我兼利するを修習したまひき。國を棄て王を捐て、財と色とを絕ち去りて、自から六波羅蜜を行ひ、人にも敎へて行はしむ。無央數劫に功を積み德を累ねたまふ。其の生處に隨ひて意の所欲に在り。無量の寶藏、自然に發應す。無數の衆生を敎化し安立して、無上正眞の道に住せしむ。

【註】願を立てゝおはるや天地の感銘するを描く。すべて此式で描かれてゐるものを歷史的事實と見て無理な謬着的解釋をつけて來たのが今日までの佛典の歷史的記述に對する解釋法であつた。

次に智情意は人間の精神生活の分類法として西洋ではカント以後のものに屬するが印度人は流石に哲學的冥想的、人類であるだけに早く既に此分類法をたて、

ねることは右の經文によつても容易に窺ひ知る事が出來る。

右の文のうち敘事の順序がどうも正しくないことが甚だしく目につく、即ち終りの方の「國を損て、財と色とを絶ち去りて、自ら六波羅蜜を行ひ」などは、もつと始めの方に持ち來つて、少くとも「此の願を建て」と「已りて一向に志を專にして」の間あたりに持ち來されねばならぬものであると思はれる。之れなども彼の四十八願の順序があまり亂雜てあるなどと同じく始め此經典は一卷の紙本になつておつたのではなくて貝葉又は樺皮等にしるされてあつたのが篇纂の際前後したのではないかと思はれるが如何であらうか。

【字意】○修滿 修飾滿足。かざりみたす。○誠諦 まこと。○諸天 欲界、色界、無色界の諸天人。○魔梵 欲界頂の魔王、色界頂の梵王。○龍神 難陀(Nanda)跋難陀(Upananda)等の八大龍王。○八部 天龍夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽のこと。佛の教を守護する役分を荷ふものといふ假定の存在なり。○恢廓 恢も廓もおほきくひろやかなことをいふ。○建立常然 建て設けられた淨土の常に變らぬこと。○兆載永劫 永い〳〵時間。兆載は支那二十三數の一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、百、千、萬、億、兆、京、垓、稠、依、溝、澗、正、載のなかの兆と載とで、非常に大きな數をいふ。○欲覺瞋覺害覺 貪欲と瞋恚と瞋恚から起る害心とをいふ。覺は思覺分別で、はつきりした考想のことである。○欲想瞋想害想 欲覺瞋覺害覺の起る因となる心持をいふ、想は想像で外界に對しておぼろげに起す氣分のことである。○不着色聲香味觸法 眼耳鼻舌身意の六根の對手となる六境に執着せぬこと。この境に執着すれば想を起し、想によつて覺を起すからである。○忍力 たへしのぶちから。○染恚癡 貪欲、(恚に對す) 瞋恚(憎に對す)癡疑。(智に對す)。○虛偽諂曲 いつはりまがること。○和顏愛語 やはらかな顏色とやさしい言葉。○先意承問 衆生の意に先だち志すところを承け問ふて、要求を滿たすことをいふ。○清淨白法 清淨潔白の事柄をいふ方法に非す佛法にて法とはすべて有形無形の存在をさす。○慙愧 みぐみ利益する。○恭敬三寶 佛寶、法寶、僧寶を敬ふこと。○奉事師長 師匠や先輩につかへること。○大莊嚴 恭敬三寶奉事師長の二莊嚴をいふ。○空無相無願 一切諸法は實の體なければ實の相もなしと觀ずるが空。實の體なければ實の相もなしと觀ずるが無相。體も相もなければ其の對手となる我が心もなしと觀ずるが無願。○無作無起 果として求めなすべきなく、因として志を起し行ふべきなしといふこと。○觀法如化 一切諸法は因緣和合のものであつて其の實の

體性といふものなく、全く幻化のものであると覺知すること。○六波羅蜜　布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の稱。○生處　人間とか天上とかいふ生れ場處。○在意所欲　意のままがふところにかなふこと。○寶藏　法門の多いことを寶の藏に喩へていふ。○發應意に應じて出ること。○安立安心立命。

或は長者、居士、豪姓、尊貴となり、或は刹利國君、轉輪聖帝となり、或は六欲天王、乃至、梵王となりて、常に四事を以て一切諸佛を供養し恭敬したまふ。是の如きの功德、稱說すべからず。

口の氣香潔にして優盋羅華の如し。身の諸〳〵の毛孔より栴檀香を出す。其の香あまねく無量の世界に薰ず、容色端正にして相好殊に妙なり。其の手より常に無盡の寶を出す。衣服、飮食、珍妙の華香、諸蓋、幢旛、莊嚴の具、是の如き等の事、諸〳〵の天人に超え、一切の法において而かも自在を得たまひき。

阿難、佛に曰さく。法藏菩薩、已に成佛して滅度を取りたまへりとやせん。未だ成佛したまはずとやせん。今現に在すとやせんと。

佛、阿難に告げたまはく。法藏菩薩、今すでに成佛して現に西方に在す。此を去ること十萬億刹なり。其佛の世界を名けて安樂と曰ふと。

阿難また問ひたてまつる。其佛成道したまひてより已來、幾の時を遷たまへりやとせんと。

佛言はく。成佛より已來、凡そ十劫を歷たまへりと。

【註】法藏なる凡人が、前記の修業を遂げて所期の通り正覺をとり成佛したることを描く。成佛したと同時に淨土も出來上つたことは云ふまでもない、修業の方法は上記の通り、其修業の期間は長載永劫と云ふ無限の長時間、成り上つた佛たる法藏の容姿は以上の如し（出來上つた淨土の有樣は以下に詳說されてある）而して右修業の完成した時即ち滅度をとる換言せば正覺を成じたのは今を去る十劫の者であると釋迦と阿難の問答を挿入してある、此問答をこゝに挿入したことは行文

上作者の凡ならざる手腕のほどが窺はれる。

偉大なる事業であつたから蓋世の偉才が異常の長年月を、不拔の精神でつき進んで來て之を完成することが出來たのであると云ふ風に措辭巧に描かれてある。

其完成は十刧の昔なりと答へてある。其の十刧の刧とは人壽十歳より百年毎に一年を增して八萬四千歳に至る間を一小刧と云ふとか其反對に八萬四千歳より百年毎に一年を減じて十歳に至る間を一小刧と云ふとか、この一增一減を合せて中刧と云ふとか頗る多樣に解釋出來るものであつて、長時と云ふことを何でも稱計し得る數で現したいと云ふ印度人特有の思想から見て、刧とは極めて長時と云ふ意たるは疑問の存せざる處で其十倍たる十刧なるものも要するに「長時」を意味したものである。作者は長載永刧と十刧とを巧に使ひわけてゐるが我國の淨土宗の西山派の系統の人々の如き經典を比較的自由に解釋する派の人は長載永刧と十刧とは同時に見てゐる位である。

もと何日の頃からは知らぬ、あまりに不明であるから無始などゝ云ふ語を用ひてゐるが其の長時以前から、如何なる理由で、何人がさうしたのか知らぬが宇宙は愛の調和體に出來上つてゐる事實を明察して、頃は十刧の昔から、した人は法藏と云ふ人で、した方法は熱心なる修業によると云ふ風に小說を創作して來たこといよ〳〵明白と云はねばならぬ。

【字意】○長者　富貴で有德の人。○居士　出家せず家にあつて佛道を修行する人。○豪姓　婆羅門の義譯。印度の種族に婆羅門（僧族）、刹帝利（王族）、毘舍、（商工族）首陀羅（百姓牧畜者）の四姓ある中、婆羅門はその最も高い位の種族で、婆羅門教の全權を握り、王位の上にあるものである。○尊貴　大臣のこと。○刹利國君　刹利は刹帝利の略。土田主と譯する。印度四姓の第二武族または王族、即ち國君をいふ。○轉輪聖帝　須彌山の四洲を治める王で、寶の輪寶を轉じて一切のものを威服するといふ。○六欲天王　欲界六天の王といふこと。四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天の王。○梵王　色界初禪天王のこと。○四事　佛を供養する四種の物柄、飲物、衣服、臥具、湯藥の稱。○優柰羅華　青蓮華のこと。○諸蓋　多くのきぬがさ。○幢旛　はたほこ。○十萬億刹　刹は國土のこと。故に十萬億土ともいふ。婆婆

世界と極樂世界との間には十萬億の佛土があるといふ意。○安樂　梵語 須摩提即ち須佉 婆 提の義譯、樂みある、樂しきといふ語、『觀經』や『阿彌陀經』には極樂と譯してある。

佛、阿難に告げたまはく。無量壽佛の威神光明は最尊第一にして、諸佛の光明の及ぶこと能はざる所なり。或は佛の光あり。百佛の世界を照す、或は千佛の世界を照す要を取りて之を言はゞ、乃ち東方恒沙の佛刹を照す。南西北方四唯上下も亦また是の如し。或は一由旬、二、三、四、五由旬を照すあり。是の如く轉倍して乃至一佛の刹土を照す。是の故に無量壽佛を無量光佛、無礙光佛、無對光佛、燄王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛と號したてまつる。

其れ衆生ありて斯の光に遇ふもの、三垢消滅し、身意柔輭にして歡喜踊躍し、善心を焉に生ず、若し三塗勤苦の處にありて此の光明を見たてまつれば、皆な休息することを得て復た苦惱なく、壽をはりての後みな解脫を蒙らん。

無量壽佛の光明顯赫にして十方諸佛の國土を照耀したまふに、焉に聞へざることなし。但、我れ今その光明を稱するのみにあらず、一切の諸佛、聲聞、緣覺諸〳〵の菩薩衆も咸く共に歎譽したまふこと亦また是の如し。若し衆生ありて其の光明の威神功德を聞きて、日夜に稱說して心を至して斷へざれば、意の願ふところに隨つて其の國に生るゝことを得、諸〳〵の菩薩聲聞の大衆のために共に歎譽せられ、其の功德を稱せられん。其れ然して後に佛道を得ん時に至りて、普く十方の諸佛菩薩のために、其の光明を歎めらるゝこと亦今の如くならん。

佛のたまはく。我、無量壽佛の光明威神の巍々として殊妙なることを說かんに、晝夜一劫すとも尙未だ盡すこと能はず。

【註】　無量壽佛卽ち法藏が佛となつて佛稱を附して阿彌陀佛と云ふ阿彌陀とは、無量壽無量光の意を有する梵語であるが今其無量壽をとつて無量壽佛と譯名をのせたものである

宇宙の働は愛てあるが宇宙そのものは意志を有する一個の人格者なりやと云はゞ否と答ふる方が近道なるを信ずる。けれども此の創作の如く此愛の一大調和體が法藏と云ふ人格者の向上によつて築かれたと云ふ風に叙述して來たら飽くまで別の一個の人格的存在として取扱ふ必要がある、且つ説明の便宜上——汎神論あたりの説明を受け入れるのは大分頭が入用であるから低級者には——別の人格者の存在として説明され又解せられるのが普通てあつて、眞理を述べると云ふ上から見ても結極左まで差支へないことに思はれる。

こゝに無量壽佛の最貴、崇高、偉大を述べ、ことに其のはなつ光明の功德について叙するや比喩の徹底してゐるに感歎を久ふせしめられる。

佛教では智慧と相化すれば光明なりとして解してゐる。智慧の相は光明、光明の本體は智慧と見てゐるのてある。かくて頻繁に光明を談ずる。今宇宙の愛が調和的に働くこと實に智慧の窮極者、智慧最第一人者の智慧によつて動かされてゐるが如く、徹底したものてある、夫れはさうてあらう、之れ以上の處理方法がない最も適當なる處理方法によつて處理され攝理されて一大調和を保つて向上して行きつゝあるのが宇宙の實體である。此智慧に處理されて、此光にあふて、三垢あるものは三垢の消滅に。三途にあるものは三途からの離去に攝理されつゝある。之を十方諸佛たらずとも如何にして口を極めて褒めないでおられようか。かつは其智慧の偉大、組織の不可思議にして殊妙なるを説かば蓋し晝夜一劫すとも尚未だ盡すこと能はぬてあらう。

【字意】 ○四維 四偶。東南、東北、西南、西北の稱。○由旬 印度の里數の名である。四十里または三十里に當る。或はまた大由旬は八十里、中由旬は六十里、小由旬は四十里であるともいふ。今日では一由旬を十六哩として計算する。○無量光 量ることのできぬ光。○無邊光 かぎることのできぬ光。○無礙光 さへることのできぬ光。○無對光 くらべものゝない光。○燄王光 すべての光の最上なる光。○清淨光 清らかな光。○歡喜光 よろこびを興へる光。○智慧光 智慧を興へる光。○不斷光 いつもたへることのない光。○難思光 思ひつくすことのできぬ光。○無稱光 ときつくすことのできぬ光。

○超日月光　日月に超えすぐれた光。○三垢　貪瞋痴の三毒。○善心　法喜心。法をよろこぶ心。○三塗　三途とも云ふ。火塗(地獄)、血塗(畜生)、刀塗(餓鬼)、即ち三悪道のこと。○解脱　煩惱の繫縛を解いて迷の世界を脱れること。さとること。

佛、阿難に語りたまはく。無量壽佛は、壽命長久にして、稱計すべからず。汝寧ろ知らんや。たとひ十方世界の無量の衆生、みな人身を得て悉く〳〵聲聞緣覺を成就せしめて都べて共に集會して、思を禪にし心を一にして、其の智力を竭して、百千萬劫において、悉く共に推算して、その壽命の長遠の數を計へんに、窮めつくして其の限極を知ること能はじ。

聲聞菩薩人天の衆の壽命の長短も、亦また是の如し。算數譬喩の能く知るところに非ざるなり、また聲聞菩薩その數はかり難し、稱計すべからず。神通洞達して威力自在なり。能く掌の中において一切世界を持せり。

佛、阿難に語りたまはく。彼の佛の初會の聲聞衆の數は、稱計すべからず。菩薩も亦然り、今の大目揵連の如く、百千萬億無量無數にして、阿僧祇那由他劫において、乃至滅度まで悉く共に計校すとも多少の數を究め了ること能はじ。譬へば大海の深廣にして無量なるが如し。たとひ人ありて其の一毛を析きて以て百分となし一分の毛を以て一滴を沾し取らんに、意に於て云何ぞ。其の滴るところのものは、彼の大海において何れをか多しとなすところぞ。

阿難、佛に白さく。彼の滴るところの水、大海に比ぶるに、多少の量、巧曆、算數言辭、譬類の能く知るところに非ざる也。

佛、阿難に語りたまはく。百千萬億那由他劫において、彼の初會の聲聞菩薩を計へんに、知るところの數は猶し一滴の如く、その知らざるところは大海の水の如しと。

【註】　無量壽佛の壽命の長久なるを云ひて往生人の壽命も亦斯くの如しと云ふは宗教に於て壽命の長久を論ずるが初歩の士にとりて極めて必要なる事であるからで

あらう、壽命の短長の如き決して事實上、しかく大問題でないことは無論である
が。

其次に聲聞、菩薩等の數が彼の佛の第一回國人會(社會)に於て亦無數であるなど
との叙述の方法は作者が今日の人であればとらなかつた處と思ふ、何となれば國
土の壯大端嚴はさとるに足るが一面聲聞や、緣覺の如き不徹底なる徒もゐるのか
との疑念をおこさしむるからである。

【字意】 ○推算 おしかぞへる。○神智洞達 不可思議の智慧ほがらかにすみわたること。○初會 佛が成道されて且つ數を布いてのちの第一回國人會と解したし。○大目犍連 略して目連ともいふ。佛十大弟子の一人で、神通第一といはれてをる。○巧曆 巧な曆術。

又その國土に七寶のもろ〳〵の樹、周く世界に滿てり。金樹、銀樹、瑠璃樹、玻璃樹、珊瑚樹、碼碯樹、硨磲樹なり。或は二寶三寶乃至七寶の轉共に合成せるあり。或は金樹に銀葉華果なるあり。或は銀樹に金葉華果なるあり、或は瑠璃樹に玻璃を葉とす、華果また然り。或は水精樹に瑠璃を葉とす、華果また然り。或は碼碯樹に瑠璃を葉とす、華果また然り。或は珊瑚樹に碼碯に衆寶を葉とす、華果また然り。

或は寶樹あり、紫金を本とし、白銀を莖とし、瑠璃を枝とし、水精を條とし、珊瑚を葉とし、碼碯を華とし硨磲を實とす。或は寶樹あり、白銀を本とし、瑠璃を莖とし、珊瑚を枝とし、碼碯を條とし、硨磲を華とし、紫金を實とす。或は寶樹あり、水精を本とし、瑠璃を莖とし、珊瑚を枝とし、碼碯を條とし、硨磲を葉とし、紫金を華とし、白銀を實とす。或は寶樹あり、瑠璃を本とし、珊瑚を莖とし、碼碯を枝とし、紫金を條とし、白銀を葉とし、水精を華とし、白銀を實とす。或は寶樹あり、珊瑚を本とし、碼碯を莖とし、紫金を枝とし、白銀を條とし、水精を葉とし、瑠璃を華とし、碼碯を實とす。或は寶樹あり、碼碯を本とし、紫金を莖とし、白銀を枝とし、瑠璃を條とし、水精を葉とし、珊瑚を華とし、碼碯を實とす。

莖とし、白銀を枝とし、瑠璃を條とし、水精を葉とし、珊瑚を華とし、碼碯を實とす。

此諸〳〵の寶樹、行々あひ値ひ、莖々あひ望み、枝々あひ準ひ、葉々あひ向ひ、華々あひ順ひ、實々あひ當れり。榮色光耀、勝て視るべからず。清風ときに發りて五の音聲を出し、微妙にして宮商自然に相和す。

又、無量壽佛の其の道場樹は高さ四百萬里、其の本の周圍五十由旬、枝葉よもに布けること二十萬里にして、一切の衆寶、自然に合成せり。月光摩尼、持海輪寶、衆寶の王たるものを以て之を莊嚴せり。條の間に周匝して寶の瓔珞を垂れたり。百千萬の色、種々に異變す。無量の光燄、照耀して極なく、珍妙の寶網その上に羅覆せり。一切の莊嚴、應に隨ひて現る。微風徐に動いて諸の枝葉を吹くに無量の妙法の音聲を演出す。其聲流れ布いて諸佛の國に徧し。

【註】極樂の形容である、燦として輝き、晱として耀れり、此の諸の寶樹、行々あひ値ひ、莖々あひ望み、葉々あひ向ひ、華々あひ順ひ、實々あひ當れり。榮色光耀、勝て視るべからず。清風ときに發りて五の音聲を出し、微妙にして宮商相和すと、紫雲に乘りて身親しく天上より極樂の風光を視る心地がする。

子供の翫具や、クリスマスツリーてもないから、金の樹に銀の葉繁り、銀の華咲き、間々銀の實の成つてゐるなどは見て綺麗な場合もあるが寧ろ煩しいと思はれる事も少なくあるまい。要は宇宙の實際が爛漫と咲ける花の如き申分なき愛の調和なることを高潮して述べたものであると解せねばならぬ。更に佛の說法する寺の庭の樹が高さ四百萬里、其の本の周圍五十由旬（一由旬を三百里と見れば千五百里）、枝葉四方に布けること二十萬里と云ふが如き說明方法は、西方十萬億刹などの思想と共に佛教界の思想家が宇宙の廣大なることによく思を潛めておつた事を察するに足り、今日の天文學が一萬光年遠方の星の存在を發見してゐる事など

と對照して面白く思はれる。

【字意】 ○硨磲 蛤類で白色の光澤あり。○玻瓈 水晶などはこれ。後に來る水精も同じ。○紫金 紫磨黃金で、金の精なるもの。○勝觀 みつくすこと。○五音聲 宮(最濁音)、商(次濁音)、角(半清半濁音)、徵(微清音)、羽(最清音)の稱。○月光摩尼 摩尼は珠寶。○周匝 あまねくしく。○瓔珞 珠玉を絲で貫いた飾。○皆網 たからつなぎのあみ。○羅覆 つらなりおほふ。

其聲をきけば深法忍を得、不退轉に往せん。佛道を成るに至つて、耳根清徹にして苦患に遭はず。目に其色を覩、耳に其聲を聞き、鼻に其香を知り、舌に其味を嘗め身に其光を觸れ、心に法を以て緣ずるに、一切みな甚深の法忍を得て不退轉に住せん佛道をなるに至るまで、六根清徹にして諸の惱患なけん。

阿難、若し彼國の人天にして此樹を見るものは、三法忍を得ん。一には音響忍、二には柔順忍、三には無生法忍なり。此みな無量壽佛の威神力の故に、本願力の故に、滿足願の故に、明了願の故に、堅固願の故に、究竟願の故なり。

佛、阿難に告げたまはく。世間の帝王に百千の音樂あり。轉輪聖王、乃至、第六天上の伎樂の音聲より展轉して相勝れたること千億萬倍なり。第六天上の萬種の樂音も無量壽國の諸の七寶樹の一種の音聲にだも如かざること千億倍なり。亦、自然の萬種の伎樂あり、又その樂の聲、法音に非ざることなし。清揚哀亮にして微妙和雅なり十方世界の音聲の中に最も第一となす。

又、講堂、精舍、宮殿、樓觀、みな七寶莊嚴して自然に化成す。また眞珠、明月摩尼の衆寶を以て、以て交露となし、其上に覆蓋せり。

內外左右に諸の浴池あり。或は十由旬、或は二十三十乃至百千由旬なり。縱廣深淺各〻みな一等なり。八功德の水、滿然として盈滿せり。清淨香潔にして味ひ甘露の如し。黃金の池には底に白銀の沙あり。白銀の池には底に黃金の沙あり。水精の池には底に瑠璃の沙あり。瑠璃の池には底に水精の沙あり、珊瑚の池には底に琥珀の沙あり。琥珀の池には底に珊瑚の沙あり。碼碯の池には底に碼碯の沙あり。硨磲の池には

底に硨磲の沙あり。白玉の池には底に紫金の沙あり。紫金の池には底に白玉の沙あり、或は二寶三寶乃至七寶うたゝ共に合成せり。

其池の岸の上に栴檀樹あり。華葉垂れ布きて香氣あまねく薰ず。天の優盋羅華、盋曇摩華、拘物頭華、分陀利華、雜色光茂にして彌く水の上を覆へり。

【註】音樂を耳にきくために受くる利益、寶樹を見るによつて受くる利益も、宇宙が自然に備へ持つてゐる本能——一の存在は他のすべての存在の全愛を被むつてゐる——の說明であつて、森の小鳥の聲も、路傍の草の葉の色もわたくし一人にと愛を及ぼして呉れてゐることを物語つたものであると解したい。

講堂、精舍、宮殿樓觀の壯嚴が此の經文の樣であつても、夫れは寧ろ甚だ飽かれ安い、微妙精巧な浴池も飽くに長くの日時を要すまい、寶池の上に華葉垂れ布いて香氣あまねく薰じても、見た瞬間に得た恍惚の感は醒めやすからう。作者は夫れを云はんとしてゐるのではない、佛陀の愛を體驗する偉大なる滿足、日時が經ち心の眼があいて來れば來るほど幸福のまさる宇宙の愛の甘味を物を以て示さうとつとめてゐるのであると見るべきである。

【字意】○深法忍　無生法忍と同じ。甚深法忍も然り。○六根　眼、耳、鼻、舌、身、意。五官と心とをいふ。○究竟願　必ず實現せしむる願。○伎樂　樂人の奏する音樂。○展轉　うたゝ。だん〳〵。○清揚哀亮　きよらかにさへわたり、あはれにたゞしく亂れぬこと。○和雅　調和雅正。とゝのひみやびやか。○精舍　寺のこと。○交露　玉で作つた幔幕。玉の光が露を交へたやうになるから交露と名けたのである。○八功德　清淨潤澤、不臭、輕、冷、輭、美、飮時調適、飮已無患の八種の德。○滿然盈滿なみ〳〵とみちみつること。○甘露　天酒ともいふ。天から降る甘い露。○白玉　玻璃のこと。○優盋羅華　青蓮華。○盋曇摩華　紅蓮華。○拘物頭華　黃蓮華。○分陀利華　白蓮華。

彼の諸〳〵の菩薩及び聲聞衆、若し寶池に入りて、意に、水をして足を沒さしめんと欲へば、水即ち足を沒す。膝に至らしめんと欲へば、即ち膝に至る。腰に至らしめんと欲へば、水即ち腰に至る。頸に至らしめんと欲へば、水即ち頸に至る。身に灌がしめんと思へば、自然に身に灌ぐ。還復さしめんとすれば、水輒ち還復る。調和冷煖に

して自然に意に隨ふ。神を開き、體を悅ばしめ、心垢を蕩除す。清明澂潔にして淨きこと形なきが如く、寶沙映徹して深きをも照さゞるなし。微瀾廻流して轉あひ灌注す。安詳にして徐に逝きて遲からず疾からず。

波揚りて無量なり。自然の妙聲、その應ふところに隨ひて聞えざるもの莫し。或は佛の聲をきゝ、或は法の聲をきゝ、或は僧の聲を聞く。或は寂靜の聲、空無我の聲大慈悲の聲、波羅蜜の聲、或は十力無畏不共法の聲、諸通慧の聲、無所作の聲、不起滅の聲、無生忍の聲、乃至甘露灌頂、衆〻の妙法の聲、是の如き等の聲、その聞くところに稱ひて歡喜すること無量なり。清淨、離欲、寂滅、眞實の義に隨順し、三寶、力、無所畏、不共の法に隨順し、通慧、菩薩聲聞所行の道に隨順す。三塗苦難の名あることなく、たゞ自然快樂の音のみあり。是の故に其國を名けて安樂と曰ふ。

阿難よ、彼佛の國土に諸の往生する者は、是の如きの淸淨の色身、諸の妙音聲、神通功德を具足す。處るところの宮殿、衣服、飮食、衆の妙華香、莊嚴の具、猶し第六天の自然の物のごとし。若し食せんと欲ふときは、七寶の盞器自然に前にあり。金銀、瑠璃、硨磲、碼碯、珊瑚、琥珀、明月、眞珠、是の如きの諸の盞、意に隨ひて至る。百味の飮食、自然に盈滿す。此食ありと雖も、實に食するものなし但、色を見、香を聞ぐに、意に食をなすと以へり。自然に飽足す。心身柔輭にして味著するところなし。事已れば化して去る。時至れば復現る。

【註】 安穩は快樂と必らずしも一致しない、無爲の樂は有爲の苦に將る苦痛なることは尠くない。此前に上ぐる寶池の極樂國人に與ふる安樂の如きは決して眞の幸福ではなく、若し額に汗して得たるものを以て生活し、飽くまで獨力獨步を好むものにとつては日出て耕し日入つて憩ふ、井を堀つて飮み、田を耕して喰ふ方遙に快樂でもあり幸福でもあるべきであるが、こゝに叙べられた寶池の例について云へば苦熱の地で且水に乏しい印度は沐浴を非常なる快樂とするから極樂の寶池に於ける沐浴の愉樂を想見することは我々の想見するのと程度が異るものあるべく

衣服、飲食物の如きこゝに上げられたる位の生活をしてゐるものは日本にも随分あり、殊に文化設備のとゝのつた西洋の豪家の如きでは無量壽經の作者が想像し得る以上の生活をしてゐて、夫れを極樂の如く思つてゐないのみならず、簡易生活をすら望んでゐる位である。かへすゝ〳〵も斯くの如き叙述を文字通りに解することは決して作者の意を汲む所以でない。一に愛の如何に至れり盡せるかを語り得ば足るとしたものであると解せねばならぬ。

【字意】○蕩除 心垢 心の垢、即ち煩惱をそゝぎのぞく。○澂潔 すみわたつて澂きこと。○映徹 すきとほること。○微濛 さゝなみ。○安詳 靜な貌をいふ。○所應 れがひのぞむところ。○空無我聲 我法二空の法を言。一切萬有は因緣によつて出來てゐるものであるから、一定の法性もなく常住の我性もないといふ教。○十力無畏不共法聲 十力と四無畏と十八不共法の法理をさす。十力とは十種の智慧力で、是處非處智力、過現未來業報智力、諸根勝劣智力、種々解智力、種々界智力、一切至處道智力、天眼無礙智力、宿命無漏智力、永斷習氣智力の稱。四無畏とは說法のときに畏れぬ四種の相で、一切智無所畏、漏盡無所畏、說障道無所畏、說盡苦道無所畏の稱。十八不共法とは佛が有したまふ十八種の不共の德で、身無失、口無失、念無失、無異想、無不定心、無不知已捨、欲無減、精進無減、念無減、慧無減、解脫無減、解脫知見無減、一切身業隨智慧行、一切口業隨智慧行、一切意業隨智慧行、智慧知過去世無礙、智慧知未來世無礙、智慧知現在世無礙の稱。○諸通慧聲 六神通のみのり。○無所作聲 平等の理をさとれば、作すべき善も、滅すべき惡もないといふ理。○不起滅聲 平等の理をさとれば起すべき善も、滅すべき惡もないといふ理。○無生忍聲 不生不滅の眞理を忍知して安心する位の理。○甘露灌頂 十地の菩薩のこと。十地の菩薩には諸佛が甘露の法水を以て其頂に灌ぐゆゑ甘露灌頂といふのである。○盜 僧侶の食器。○明月明月摩尼のこと。○百味飲食 數多き飯食。○飽足 あきたる。○味著 味に執著すること。

彼の佛の國土は清淨安穩にして微妙快樂なり。無爲泥洹の道に次し。其の諸〳〵の聲聞、菩薩、人天、智慧高明にして神通洞達せり。咸く同じく一類にして形に異狀なし。但、餘方に順ふに因るが故に天人の名あり。顏貌端正にして世に超えて稀有なり。容色微妙にして天に非ず人に非ず、みな自然虛無の身、無極の體を受けたり。佛、阿難に告げたまはく。譬へば世間に貧窮乞人の帝王の邊にあらんが如し。形貌

容狀、寧ろ類すべけんや。阿難、佛に白さく。假令この人、帝王の邊にあらんに、羸陋醜惡にして、以て喩とすることなけん。百千萬億不可計倍なればなり。然る所以は貧窮乞人、底極廝下にして、衣、形を蔽さず、食趣に命を支ふ、飢寒困苦、人理殆んど盡きなんとす。みな前世に德本を植ゑず、財を積みて施さず、有るに富みてますます慳み、たゞ唐に貪求して厭ふことなし。敢て善を修せず、惡を犯すこと山のごとく積めるに坐してなり。是の如くして壽終り　財寶消散して、身を苦しましめ聚積して之がため、憂惱すれども已において益なし。徒に他の有となる。善として怙むべきなく、德として恃むべきなし。是の故に死して惡趣に墮して、此長苦を受く。罪畢りて出づることを得て、生れて下賤となり、愚鄙廝極にして人類に示同す。世間に帝王の人中の獨尊なる所以は、みな宿世に德を積めるによつて致すところなり。慈惠博く施し、仁愛兼ねて濟ふ。信を履み善を修めて違諍するところなし。是を以て壽終り、福應じて善道に上ることを得。天上に上生して、この福樂をうく。積善の餘慶に今人となることを得たり。適王家に生れて自然に尊貴なり。儀容端正にして衆に敬事せられ、妙衣珍膳、心に隨ひて服御す。宿福の追ふところなるが故に、能くこれを致す。

佛、阿難に告げたまはく。汝が言是なり。計るに、帝王の如き人中の尊貴にして形色端正なりと雖も、之を轉輪聖王に比ぶるに、甚だ鄙陋なりとす。猶し彼の乞人の帝王の邊にあるが如し。轉輪聖王は威相殊妙にして天下に第一なれども、これを忉利天王に比ぶるに又また醜惡にして相喩ふるを得ざること萬億倍なり。假令、天帝を第六天王に比ぶるに、百千億倍あひ類せざるなり。設ひ第六天王を無量壽佛國の菩薩聲聞に比ぶるに、光顏容色相及逮ばざること、百千萬億不可計倍なり。

佛、阿難に告げたまはく無量壽國の其の諸の天人、衣服、飮食、華香、瓔珞、繒蓋、幢幡、微妙の音聲、所居の舍宅、宮殿樓閣、その形色にかなひて高下大小あり。或は一寶二寶、乃至無量の衆寶、意の所欲に隨ひて念に應じて即ち至る。又、衆寶の

妙衣を以て徧く其の地に布けり。一切の天人、これを踐みて行く。無量の寶網、佛土に彌く覆へり、みな金縷眞珠百千の雜寶、奇妙珍異なるを以て、莊嚴し交飾せり。四面に周布して垂るゝに寶鈴を以てす。光色晃耀にして盡極嚴麗なり。

自然の德風やうやく起りて微動す。その風調和にして寒からず暑からず、温凉柔輭にして遲からず疾からず。諸〻の羅網及び衆の寶樹を吹くに、無量微妙の法音を演發し。萬種温雅の德香を流布す。それを聞ぐことあれば、塵勞垢習、自然に起らず、風その身に觸るゝに、みな快樂を得。譬へば比丘の滅盡三昧を得るが如し。また風華を吹き散らして、あまねく佛土に滿つ。色の次第に從ひて雜亂せず、柔輭光澤にして馨香芬烈せり。足その上を履むに、陷み下ること四寸、足をあげ已るに隨ひて還復すること故の如し。華用ゐること已訖れば、地すなはち開き裂けて次を以て化沒す。清淨にして遺なし。この時節に隨ひて、風華を吹きちらす。是の如くすること六返なり。又、衆寶の蓮華、世界に周滿せり。一一の寶華に百千億の葉あり。その華の光明は

無量種の色なり。青色には青光あり、白色には白光あり、玄、黄、朱、紫の光色もまた然り。暐曄煥爛として日月よりも明曜なり。一一の華の中より三十六百千億の光を出す。一一の光の中より三十六百千億の佛を出す。身の色紫金にして相好殊特なり一一の諸佛また百千の光明を放ち、普く十方のために微妙の法を說き給ふ。是の如き諸佛各々無量の衆生を佛の正道に安立せしめたまふ。

【註】貧窮なる乞人と帝王、乞人たることもとより望む處でなく帝王もあへて好んでなりたくは思はぬが、無我に愛を他に施すを正しとする信念と之を如實に躬行する意志が欲しい。

財を施すこと布施太子の如く之を誓願なるが故にと云ふ樣な行き方も好ましくはないが、徒らに賴んで施こさぬ人の考もわからぬ。

【字意】 ○無爲泥洹　無爲とは無爲の法て人あつて作爲して出來たものでなく本來から宇宙に備つてゐる眞理のこと泥洹涅槃のこと。○餘方　極樂以外の世界。○自然虛無之身無極之體　自然、虛無、無極はみな涅槃の

別名で、極樂で受ける身體は、この涅槃の理にかなうたものであるといふ意である。○形貌容狀かたち、かほ、ようす。○羸陋醜惡　羸は弱、または痩といふこと、陋はいやしいこと、醜惡はみにくいこと。○不可計倍　はかるべからざるほどの倍數。○底極廝下　底極は最極で、もつとも甚しいこと。廝下は陋下で、いやしいこと。○人理　人間の道理。○德本　善根のこと。○宿世　前世のこと。○淨　さからひあらそふ。○積善餘慶　『易』にも『積善の家には必ず餘慶あり』とある。善をつんだ報として慶しいこと。○服御　妙衣を服用し珍膳を進御すること。○宿福　さきの世の福德。○羅網　寶のあみ。○塵勞垢習　塵勞は煩惱のこと。垢習は煩惱氣のあること。○滅盡三昧　心の想がすべて滅し盡きる定。羅漢が閑靜の樂を味ふために入るところの滅盡定のことである。○馨香芬照　かほりにほひのつよいこと。○暐曄煥爛　四字みなかゞやくといふ意。

戲曲　平等覺

第二場

（內藤誠一の新居。家はさゝやかであるが空地が廣いと云ふ感を與へる舞臺面上手寄りに座敷を正面に見せる。座敷の上手は半ば引込みて格子のはまつた高窓其內らは玄關の體。高窓の下には竹垣を廻らして鷄數羽放してある。座敷の正面は床、襖。上手から下手にかけて室に不似合に思はれる位の廣き廻り椽がある。椽の適宜の處に籐のテーブルと籐椅子二脚並べ、テーブルの上に繡目兒の籠が置いてある。舞臺の手前から下手は庭で、下手奧寄りに井戸あり、竹竿の釣瓶が枯木に立てかけてある。井戸のあたりは僅に小徑を殘して草花が處せまきまで繁つてゐる。正面の方の庭には盆栽が地上に之亦處せまきまで並べられてある。幕あけば誠一はひとり盆栽の間に身を屈めて頻りに其手入れをしてゐる

身には古びた服をつけ、古びた麥藁帽をかぶつてゐる。すべて郊外生活の日曜の朝の體。

やがて園子が襖をあけて小鳥用の小さな擂鉢を持つて現れる。白きエプロン、荒い紺尻白の着物、紅い襷等新女房らしく、いそ〳〵としてゐる。)

園子——あなた、繪目兒の餌を未だお造りになりませんの?。

誠一——(俯いたまゝ。)おや、未だ造つてやらなかつたかね。道理て頻りに催促的の暗方をやつておつたよ。(間。)園さん何か用事があるのかい。

園子——あたくし?。なにも御座いませんけれど、あなたがお忙しければわたくしが造りませうか。

誠一——すまないが造つてやつてお呉れ。僕も直ぐ手があくんだけれど、夫れからでもいゝのだけれど耳のはたて餌を催促されると氣忙しいものだからなア。

園子——ではわたくしが造りませう。あなた何をしてゐらつしやいますの、今日は大分お手間がとれますのね。

誠一——さうだ。何しろニウトンに無理から味方をしようとしてゐるのでね。

園子——ニウトンにて御座いますつて?。

誠一——地球の引力に反抗するのてね此枝がさ。だから地球に棒抗を打つて縛りつけてやらうと思つてゐるのだよ。

園子——(降りて來て近々と誠一に身を寄せる。)どれて御座いますの、地球の引力に反抗する枝だなんて?。

誠一——こいつ〳〵。ちよつと壓へてゐて呉れないか、こゝん處に三角形の傷をつけて夫れから先の方を紐で地面へ引きつけておいてやる計畫なんだ。

園子——大丈夫ですの?。そんな事をなさつて、細い枝ぢや御座いませんか傷をつけたりなさつたら其處から折れはしないでせうか……。

誠一——折れるかな?。さう云へば少し不安になつて來たぞ。三角形の傷に堪へない

かも知れないね。角をためて牛を殺しちや何にもならないからなア、どうしよう。

園子――でもわたくし何も存じませんのですよ、あなたのお好きの様に遊ばせ、持つてゐませうか。

誠一――いや、ちや構はないよ。兎に角、同盟國の援助を借りずにやつて見よう。

園子――いやて御座いますよ同盟國だなんて……。

誠一――おや、同盟國ぢやなかつたかなア。そも〳〵夫婦と云ふものは苦樂を共にするものてあるから之れを以て攻守同盟に該當すると認めておつたんだがなア。

園子――そんなら同盟國でもよろしう御座います。ではもし同盟國の天子さま。わたくしは繪目兒の餌を拵らへますよ。菜葉は大根がよろしう御座いますか。

誠一――あゝ大根がいゝだらう。出來上つたら一度加減をみておやりよ。

園子――加減を見るつて、舐めて見るのて御座いますが。

誠一――勿論、お前が其可愛らしい口で舐めて見てやつたらさぞ繪目兒は喜ぶことだらうね。てもあいつは雄だから之れはちと油斷がならないぞ。

園子――まあ、いやな事仰しやる、あなた舐めて見て下さいましね、出來たら持つて參りますから。

誠一――冗談だよ。いゝ加減にしておけばいゝんだよ、早くしておやり、頻りにせがんてゐるぢやないか。

園子――はい〳〵承知いたしました。

誠一――園さん〳〵。

園子――（冗談らしく。）はい〳〵何て御座いますか。

誠一――茶化してはいけないよ、眞面目で言つてゐるのに。（問）大根の葉をとつたらこへ來てお擦り。

園子――そこで？そこでは擦鉢がすれないでは御座いませんか。

誠一――いや地面に尻餅をついて、擦鉢を足で挾んで、がり〳〵やれますよ。

園子――まさか。わたくしは女で御座いますからね。

誠一――あゝさうでしたかちつとも知りませんでした。

園子――まあ！。御冗談ばつかし。

誠一――ちや、こうしよう僕も此盆栽の方はこのまゝ打ちつやといて其の處置手段はおつて熟考の上と云ふ事にしておこう、夫れからこちらの方にかゝらう、之れなれば椽側でゞも出來るんだから。お前は菜葉を摘んでおいで。

園子――はい。（菜葉を摘んで來て椽側に擦鉢を据へる。）

誠一――（柏の盆栽を持つて椽側の處に來る。）いゝお天氣だね。

園子――本當に、こんないゝお天氣の日曜も少なう御座いますわね。（葉をちぎつて擦鉢に入れる。擦り始める、擦鉢が動くので困る。）

誠一――わたしが持つてゐて上げよう。

園子――どうも有がたうさま。

誠一――園さん、こうしてゐるとあなたから何だか頻りにいゝ香が送られて來るが、美人の皮膚と云ふものは綺麗なだけてなくていゝ香まで發散するものかね。

園子――まあ、そんな事仰しやるもんぢやありませんわ、男の方が。

誠一――やあ之は失敬、とり消し〳〵。でも此頃は血色が馬鹿によくなつて顏が光つてるね。

園子――そんな事仰しやつて下さると嬉しう御座いますわ。

誠一――肥つて來た樣だね。

園子――あなたのお陰て御座いますわ（俯いて涙ぐむ。）わたくしの樣なものを可愛がつて下さつて、わたくし本當に幸福！此頃は……。

誠一――僕とのこんな生活がいゝね。

園子――はい。

誠一――こんな生活は何日引くりかへつてしまうかも知れないがね。

園子――まあいやな事……。

誠一――僕が急病でころりと死んでしまうかも知れないからね。

園子――いやて御座いますよ。

誠一――でも實際あり得る事だからね、引くりかへるかも知れない様な不安な幸福は本當の幸福ぢやないね、本當の幸福と云ふものはこんなものぢやないかも知れないね。

園子――そんなもので御座いませうか。

誠一――眼のつけ處が違つてゐるかも知れないね。

園子――兎に角わたくしはあなたのお側において頂くのが幸福だと思つてゐるので御座いますわ。可愛がつて頂くのが……。

誠一――それなれば大分近い様だね、唯の境遇と云ふ處に眼をつけないで、愛して貰つてゐると云ふ境遇に眼をつけてゐるから。

園子――さうて御座いませうか。

誠一――あとの方だと愛して貰つておつたらどんな境遇におつても幸福だと云ふ事になるてせう、だから。

園子――夫れはどう云ふ意味で御座いますの。

誠一――境遇だけを幸福と思つてゐるのだつたら境遇が引くりかへつてしまへばもう幸福がなくなるぢやないか。

園子――夫れはさうて御座います。

誠一――愛して貰つてゐると云ふ境遇が幸福だつたら愛が引くりかへらない限り幸福は亡びないてせう。だからこんなお前と僕との此の生活が引くりかへつてもお前は幸福だらうぢやないか。

園子――はい、よくわかりました、夫れは。(間)でもあなたがお逝くなりなつたりなんかしたら、そんな事になれば愛して下さる人がなくなるのだから幸福もなくなりま

すわね。

誠一――だからわたくしは幸福、本當に！と云ふお前の言葉は當らないわけだね、本當の幸福なれば、どんな事があつても無くなるものではない、無くなつたり、塲合によつて引くりかへつたりするものは本當ではない。

園子――そんな本當の幸福が御座いますでせうか？

誠一――夫れはある道理だね、亡びない人に、すなはちころりと頓死しない人に、そんな存在に可愛がつて貰へればね。全く夫れだよ。

園子――まあ、又御冗談を……そんな人が御座いますものですが。

誠一――大ありだよ、大ありだよ。人ぢやない、人以上のもので……。（此間園子は絶へず擦鉢をすり、誠一は熱心に擦鉢を壓へてゐる。日山重三新妻のまさ子と拔き足さし足で入り來り、さつと近よる。誠一は磨鉢をはなし、園子はすりこ木を持つたまゝ驚いて立ち上る。）

誠一――やあ、之れはゐらつしやい……。

重三――はゝゝゝ、ゐらつしやいてもないよ。玄關でいくらお賴み申しても出て來ないから居ないのかと思へば聲がするへがないから不思議に思つてだまつて上つて來たんだよ。今園子と禪宗の問答をやつてゐる樣だから。益々聲をはりあげてもちつとも手答

誠一――はゝゝゝさうてしたか、やあ全く之は失敬しました。姉さんもようこそ。

まさ子――勝手に上つて來たりなんかしましてほんとに失禮を……。（間）

誠一――さあ、どうぞ、兎に角其處の椅子におかけ下さい。

二人――ありがたう。

まさ子――（椅子にかけながら）園子さん、あなたそれはなあに？。

園子――之れ？之は繡目兎の餌て御座いますの。

まさ子――さう、わたくしは又綠のインキかと思つてよ、そんなに擦らうと思へば大變てせうね。

園子――（恥かしげに。）お話をきゝながら夢中ですつておつたもんですから。

重三――（庭を見廻はし）随分お手入れが届いてゐますね。

誠一――はゝゝ、御覧の通りの素人細工て。

まさ子――よう御座んすわね郊外生活は全く。

誠一――今日はあばら家へお揃ひで遊びに來て下さつたんですか、わざ〳〵。

重三――いやそう云ふわけぢやないのだけれど、僕は小々君に用事があつてね、まさは又別に園を芝居へ連れて行きたいとかてね、一緒にやつて來たわけだ。

誠一――はゝん、園は大喜びでせう。

まさ子――誠一さんあなたもゐらしやいね。

誠一――兄さんもゐらしやるんてすか。

重三――僕はね、貧乏暇なし、本當に醫者になんか孫子の代までさすもんぢやない、こんな日にまで穢い患者の手を握りに歩かなくちやならない。

誠一――なるほどね、醫者は實際難儀ですね、でわたしに御用事とは……。

（園子茶を入れて現れ、三人の前に置く。）

重三――いや外ぢやないが、大したものでもないんだが、我々兄妹が親父から譲られたものゝ内園の分を君に貰つてもらはうと思つてね、其事をきめに來た様な譯だが出し抜けだけれど貰つて呉れるでせうね。

誠一――何かと思つたらそんな事てすか、頂戴しますよ、何でもかまいませんなるべく餘慶に……。

重三――（呆れて）なるべく餘慶に？、之は以外だ。

誠一――はあ。

重――へえん、又斷るかと思つた位だつた。潔白な君の事だから。

誠一――（殊心に。）潔白でも何でも金の事は又別問題ですからね。

（重三とまさ子は呆れて顔を見合し園子は涙ぐむ。）

誠一――（厳粛に。）僕は僕についた金は入りません。

重三――えつ？、君についた金はいらない？。

誠一――園についた金もいりません。

重三――園についた金もいらん。

誠一――金の保管をやりませう、金は保管さるべきものです、私に持たるべきもので
ないと云ふ意見を持つてゐます、萬人の爲めに最も適當に保管出來る人が、萬人の
ために保管の任に當るのがいゝのだと思ひます。之れほど實行しやすい事て、さう
して實行せねばならぬことてあつて、しかも實行されてゐないものはありません。
わたしは此の陋屋に住んで世界の富の保管に當らせて呉れないかと始終思つてゐる
んてすから、此の古服をきて三井三菱の富の管理者になりたいと思つてゐる人間で
すから、喜んであなたが、園の分として
管及處分です、かまいませんでせう。

重三――そら無論自由に處分して貰つていゝてす。ね、園、自由に誠一君に處分を一
任するね。

園子――はい、わたくしはお金なんか少しも欲しい事御座いません。唯……。

重三――誠一君あれば足るか、はゝゝゝ。

まさ子――ほゝゝゝ。

園子――まあ、いやな兄さま……（恥かしさうに奥に逃げてはいる。）

重三――ぢやなるべく餘慶に差上げる事にして、あとで目録を作つて持たせて來せ
う。

誠一――え、どうぞよろしく。おや〳〵話に身が入つて繃目兒はおるすだ。（奥に
向つて。）おい園さん、餌をとつてお呉れ、夫れ本箱の上にのつかつてゐるだらう。

園子――はい、あの誠にすみませんが、一寸あなた御自分てお取り下さいません？、
ちよつと手がはなし惡いので御座いますが。

誠一――おつと來た。何かやつてゐるんだね。之は思いやりがなかつた。(奥にはいる。)

まさ子――隨分お二人は仲がいゝのねゝ。

重三――うん、園も今ては幸福だ。何しろ誠一君のやうな人間も稀だからね。

まさ子――緣は妙なものね。さうして何が幸福になるかわからないものですわね。

重三――全くだ。

まさ子――園子さんも實にいゝ人ですものね。

重三――俺れの妹だけれど實にいゝ奴だ、天分の豊かなね(間)。(誠一餌を捧へて來る。)やあもう出來たの?。

誠一――何分お料理が簡單ですからね。(鳥に餌をさす、其處へ園子が村地恭助と妻のこま子を案内して來る。)

園子――さあ、奥さまどうぞ、村地の兄さまも……。

重三――おや〳〵。誰かと思つたよ、之は不可思議千萬だね、君が奥さん同道で、しかもこんな處へやつて來るとは。

こま子――おや、何が不可思議千萬て御座いますの。H山さん。聞きすてになりかねますね。わたしが宅と同道して來るのを不思議だとか千萬だとか……。

恭助――然り〳〵。

重三――いやなにさう云ふ風にとられては困りますよ、あまり、御同道なさらぬお二人が、御同道て、しかもこんな不思議な處へてすから、不思議はあとの方へくつゝいてゐるのですから何卒あしからず、お二人の御同道は極めて當然の出來事て、どうぞ、始終御遠慮なく……。

こま子――いらぬ御世話で御座いますよ、あなた等だつて二人連れの癖に。

重三――われ〳〵は始終で御座いますから。

こま子――(恭助に)あなた、何とか仰しやいよ、わたし等がこんなに云はれてゐるのに……。

恭助――お前の味方になる氣はしないよ、いつもとつちめられてゐるんだからいゝ氣味だ。

こま子――あなたがわたしにとつちめられてゐるもんですか。

重三――てもよくこゝにゐる事がわかりましたね。

こま子――お宅へ上つて、そうして、こちらだときいたもんですから直に其足てこちらへ伺つたのよ。て、まさ子さんお芝居行きでせう、わたしもお供さして下さいよ。

まさ子――まあ奥さまも！。そう、嬉れしいこと。

こま子――園子さんもゐらしやるんでせう。

園子――わたくし？さあ……。

こま子――ゐらつしやいよ。ゐらつしやるものよ。當節の婦人が家にばかり引籠つてゐてどうしますの。お芝居御座れ。パザー。演藝會、社會運動、お相撲にまで出かけて行くのが時代相應よ。

恭助――やい〳〵。默つてをればいゝ氣になりやがつて、お相撲だの、社會運動だの、そんなに出歩るかれて亭主たるものがたまるかい。

こま子――いゝんですよ、內助の功は充分に上げ、當然の責任は十分に果し、なほ餘力を以て社會運動に……。

恭助――ば、ば、馬鹿をほざくない。女の社會運動とは嫉妬公行の別名だ。やれ婦人會だの、公娼廢止運動だの、婦人の最大惡癖たる家庭に於ける燒餅に飽きたらずして、外にまで出て紳士の行動を束縛しようとする……。

こま子――おや、あなたの御見解のせまいのにも困りものですね、公娼廢止運動だけが婦人の社會運動では御座いませんよ。

まさ子――慈善音樂會、花祭り、愛國婦人會、廢兵保護、特志看護婦、最近ては男子が匙を投げた物價低落の實際運動……。

こま子――さうですとも〳〵。

恭助――亭主泣かせの女社會運動者よ。汝の家庭の臺所から鼠の巢を摘み出すにつとめよ。汝の子供を雪隱同樣の糞便中から救ふべしだ。

まさ子――つとめはつとめ運動は運動とちやんと區別を立てゝ致します分は差支へ御座いませんと思ひますが。

恭助――家庭の女にはそんな暇を與へてありませんよ。完全に內助の功を盡さんとすれば日も之れ足らずです。

こま子――假りに一歩を讓つて多少內助の功が不充分でも、女は女のみの持つてゐる神に近き同情、優しみ、溫情の天質を以て男子の企て及ばぬ眞の愛の社會運動を起すことは必要缺くべからざる事だわ。

恭助――溫情がきいて呆れら。生白い役者の顏を見に行くべく芝居行を亭主にせがむ處に女の優しみ、溫情は早速役立ちますかこま子――野心が男子によい事わるい事のいろ〳〵な事をさせる樣に、婦人の溫情も亦いろ〳〵な事をさせます。お芝居の如き一歩を讓つてわるい事だとしても、現に婦人てなければ出來ぬ、婦人の優しい天質に俟たねば行へぬ社會運動があるでは御座いませんか、男のナイチンゲールは未だ聞ませんものね。女の女たる優しい精神の發露は何と云つても美しいものです。夫れが男子になると野心と名譽とを打算してからでないと決して仕事を致しませんよ、假面を脫げよと云つて上げたいわ。

恭助――大河の決した樣に吹きやがる。

こま子――わたしは男子全體に向つて請求したいのよ。男子はお金を儲けるために一生懸命働くべし、儲けたるお金は皆婦人に捧ぐべし、而して社會の何のために用ふべきかを女の優しい神性に問ふべしと、少くとも男子が社會運動に携はらんとする時は其指導者として婦人を擇ばねば必らず野心と打算の邪道に落ちますよ。あなた、此の意見は法律にして勵行するだけの價値があると思はなくつて？。

恭助――勝手に喋りやがれ。口で手前に勝たうた思はないんだ（（突然大聲にて。）やあや
あ大變だ〳〵。大變な事を忘れてをつた。おい日山、我輩は貴様に一大事件の報告
のためにやつて來たんだよ、すつかり忘れちやつた。雌鷄のお喋りも實に困りもの
だ人の重大要務をやゝもすれは忘れしめるから。

こま子――夫れはあなたの記憶力が惡いのですわ、兎に角あなたは記憶力が惡いのだ
からお忘れにならないうちに、お芝居行の事を先にきめませうよ。

恭助――駄れ！女が三人よると姦しいと云が……や之れは失禮お二方は別問題です
よ。

こま子――男が二人よればお酒を飲む相談となり。遊びに行く相談となる。

恭助――家の女房の待遇よろしきを得ざるが爲めだ。いや、之れも別問題々々〳〵、こ
の園さんに至つては申分之なくさふらふ。いや、まさ子さんも夫れ〳〵。

こま子――わにくしに申分があるなら承りませう。仰しやつて下さい、ど
うぞ。

恭助――一言にして盡く、從順溫良たれだ。

こま子――夫れではあなた及村地家のお爲になりません。

恭助――打つちやつといて呉れ。いくらお前が監督嚴重にやつても俺れは孔子にもな
れなければロスチャイルドだけの金も出來ない。

こま子――けれどもわたしがついてゐるので紳士になれます。

恭助――やれ〳〵俺れも女房から紳士にして貰つてゐるかなア。

重三――何だい一大事件とは？。

恭助――その事〳〵。皆駄つてろよ、いやこま子だけ駄つてりやいゝんだ。おつと夫
れまでに三人の女は出しちやつたらどうだい。え、內藤君も。

こま子――あら皆さん御一緒に參らうぢや御座いませんか。

恭助――箆棒め、重大事件があるんだ、女の尻にくつゝいて乞食芝居が見に行けるか

い。

こま子――ぢや、まさ子さん、園子さん參りませう、わたし達がゐると大方お邪魔になるんでせうから。

まさ子――では行つてよ御座んすか。

重三――あゝいゝよ。

誠一――お前もお供してお行き。（三人は奥に入る。）

恭助――（摩な落し眞面目に。）實は内藤君もきいて呉れ、のう日山忘れんとして忘れられん無念の思出だ、夫れあの松本の奴さ。

重三――松本がどうした？。

恭助――あの伯爵の息子、きやつだよ、惡黨のきやつだよ。そ奴と、其妹の二人が僕の病院に入院してやがるんだ。

重三――はゝん！。

恭助――どうだ、え、おい、秋は來れりだ、惡黨野郎と其の妹の花世と云ふ奴だ。

重三――ふうん、どうしてだい。

恭助――野郎の方は淋毒性のひどい關節炎で、妹は重い腹膜結核と來てゐるんだい、一體？

重三――何日から君ん處にはいつてゐるんだ。

恭助――男の方は、はいつてからもう二個月ほどになる。知らなかつたんだよ、例の我輩の癖でね、極端に患者の名前に注意しないもんだから、最近まで少しも知らなかつたんだよ。夫れであの惡魔野郎とも知らず何とかしてよくしてやりたいといろいろ苦心してをつたものさ。丸切鬼の金棒の修繕をやつてゐる樣なものだね。わかつてから阿房らしくなつちやつた。處が幸ひと今日まで治りやがらないんだ。其處へ妹の方が赤十字の方から轉院して來たんだらう、親父がついて來て、わざ〳〵我輩に面會してさ。涙を流さんばかりに嘆願しやがるぢやないか。其時に占めたと思つたんだね、其姉を、おのれつと思ひ込んだ譯さ。さうすると話のうちに野郎の入

院してゐる事を云ひ出しやがつたんだらう。占め〳〵、今や覆轍の時至ると腹の中では思へども、飽くまで知らぬ顔で、よろしい引き受けませう。此の村地を信じてまかすと云ふなれば泰西醫學の粋をつくして智力の限りをしぼつて二人を治して上げようと引き受けてやつた譯さ。親父め、喜びやがつてさ。先生の其言葉をきいて實に安心した、既に二人とも助けられた樣なある暗示を得た、有がたいと喜びやがつてさ夫れから自分もあまり力のない人間ではない、幸にして二人の命を助けて頂いたら先生をすてゝはおさおせぬとかね。糞でも喰へ頓地氣奴と思つておつたよ。で要するに二人の命は完全に俺れの手に握つたわけさ。おい日山。天網恢々疎にして漏れず、實に愉快だらう。

重三――愉快だ！。（手を空にふる）愉快極まる。やつて呉れるか？。

恭助――〆やらないてかさ。腹の癒へるまで復讐してやるぞ。苦しめて〳〵殺してやるぞ。いやなか〳〵一思ひには殺さない。あんな野郎南京虫か油虫の樣に捻りつぶすにや譯ないがそんな事では腹は癒へない。決して殺さないで苦しめてやる。袋の鼠だ、なあに醫者の天職もこゝに至つては超越してゐるんだ。神業を行ふんだからな無道の虐惡に對し天に代つて制裁を加へてやるんだから差支はない。決して逃がさない。羽がい締めにしておいて神經を一本々々つゝいてやるつもりだ。

重三――妹の方はどうなんだい。

恭助――こいつは譯はない、惡いんだから、こいつは多分相當の事をしてやつても駄目だらう、大分ひどく腹膜を侵されてゐるから駄目は駄目だが。

重三――そいつもやつゝけるかね。

恭助――なに？なんだつて。そいつもやつゝけるかいとは情けないぢやないか。あな油虫一匹位を處分してきやつ等の罪惡がつぐなへるかい、貴樣の腹がいへるかい。

重三――やつて呉れ、どうぞ充分やつて呉れ、頼む！。

恭助――當り前だ、野郎の一家一族を鏖殺しにしてもあれとはさつ引きにやならないんだ。鏖殺しにする以上に無念を晴らす手段は俺れに任かしておけ、日山、着々實行して進行の經過は貴樣に知らす、女房にも他言無用だよ。内藤君は無論喋る樣な男でないから安心だが。

重三――痛快だ、愉快だ。聞いたゞけても胸がすく、氣持がいゝ、しかし途中で逃げやしまいな。

恭助――大丈夫。安心してろ。向ふが馬鹿に信頼してやがるんだ。細工は流々だ。貴樣がそんなに喜ぶので馬鹿に嬉しくなつちやつた。おい前祝に何處かへ出かけて一ぱいやつゝけようか。

重三――よからう。出かけよう。（立ち上る。）ぢや内藤君失敬するよ。

恭助――大變失敬したね。

誠一――ては又お趣し下さい。（幕。）

小說平等覺（二）

佛、彌勒菩薩、もろ〳〵の天人等に告げたまはく。無量壽國の聲聞菩薩の功德智慧は稱說すべからず。また其の國土の微妙安樂にして、清淨なること此のごとし。何ぞ力めて善をなして、道の自然なることを念ひて、上下なく洞達して邊際なきことを著さゞらん。宜しく各つとめて精進して、努力みづから之を求むべし。必ず超絶して去ることを得て、安養國に往生せよ。橫に五惡趣を截りて、惡趣自然に閉ぢ、道に昇ること窮極なからん。往きやすくして人なし。その國逆違せず、自然の牽くところなり。何ぞ世事をすてゝ勤行して道德を求めざらん。極めて長生を獲べし。壽樂き

はまりあることなけん。

然るに世の人薄俗にして、共に不急の事を諍ふ。此の劇惡極苦のなかにおいて、身の營務をつとめて以て自ら給濟す。尊もなく卑もなく、貧もなく富もなく、少長男女ともに錢財を憂ふ。有無同じく然り。憂思まさに等し。屏營愁苦して念を累ね慮を積み、心のために走せ使はれて、安きときあることなし。

田あれば田をうれひ、宅あれば宅をうれひ、牛馬六畜、奴婢、錢財、衣食、什物、またともに之をうれふ。思をかさね息を累みて、憂念し愁怖す。橫に非常の水火、盜賊、怨家、債主のために焚漂し劫奪せられ、消散し磨滅す。憂毒悩々として解くるときあることなし。憤を心の中にむすびて憂惱をはなれず、心堅く意かたく、まさに縱捨することなし。或は摧碎に坐りて身ほろび命終れば、これを棄捐して去り、誰も隨ふものなし。尊貴も豪富も、またこの患あり。憂懼萬端にして勤苦かくのごとしもろ〳〵の寒熱を結びて痛とともに居る。

【註】 こゝより無量壽經は下卷となり、作者は筆端を一轉して佛(釋迦)の說法の相手を彌勒菩薩にかへてゐる。極樂國の一大調和體なることを說いて其處に往生することを願へ、卽ち宇宙の愛に目醒めよと說いてゐる。

關係は、其一人が全宇宙の愛を受けてゐる、日本一國(六千萬人の人口があるとしていて云へばわたくし一人は他の五千九百九十九萬九千九百九十九人の愛のすべてを受けてゐる。其わたくし一人以外のすべての人はわたくし一人のために存在してゐる。其すべての人は知るまいが、事實は自分の全部をあげて他を愛せんと云ふ徹底した希望、誓願を以て此宇宙の間に存在してゐるのである、いつからか又何の故か、夫れは知らぬ、水は冷たく、石は堅いのが本具の性質なのである。夫れがわからぬ。然り愛が本具の性質なる一の絶對的事實と、夫れがわからぬ、眼は與へたが頭から風呂敷をかむせたと云ふ樣に、無明と云ふ本具の愛の性質を一寸わからぬやうにする夢のベールをかむせられて宇宙の間にほり出されてさまようてゐる、夫れが汝等である、目醒めよ、人生の事實を

見よと叫んでゐるのである。

極樂の有樣をあげ、茲に往生せん事を願へよとすゝめてなせそんな不急な本來の目的に相反した作惡にふけつてゐるのだと叙述を一轉せしめて來た處である。

【字意】○無上下　すべての人。○超絶去　生死の海を超え、迷の絆を絶つて娑婆世界を去ること。○五惡趣　地獄、餓鬼、畜生、人間、天上の五は、迷によつて趣くところ也。惡趣といふ。○其國不逆違　さからひたがはず、引きよせるといふこゝろ。○自然之所楽　他力自然のひくところ、宇宙本具の公理と云ふ意。○道德　他力大道の功德のこゝろ。○薄俗　薄情な風俗。○給濟　供給濟計し身を養ひ活計をたてること。○屛營　氣をふさいで。うろたへること。○六畜　牛、馬、犬、羊、豕、鷄をいふ。そのうち牛と馬とを出して牛馬其他を一口に六畜といふたのである。○什物　道具。○息　歎息。○忪々　心のおそれ亂れるさまをいふ。○縱捨　はなちすてる。氣のはれること○摧碎　水や火のために、こおしくだかれること。

貧窮下劣にして困乏して常に無けたり。田なければまた憂へて田あらんと欲ひ、宅なければまた憂へて宅あらんと欲ひ、牛馬六畜、奴婢、錢財、衣食、什物なければ、また憂へてこれあらんと欲ふ。たま〳〵一あればまた一少け、是れあれば是れ少け、

齊等あらんと思ふ。たま〳〵具にあらんと欲へば、すなはちまた糜散す。是のごとく憂苦して當にまた求索すれども、時に得ること能はず。思想して益なし。身心ともに勞れて坐起やすからず。憂念あひ隨ひて勤苦かくの如し。またもろ〳〵の寒熱を結び て、痛と共に居る。或時はこれに坐りて身を終へ命を夭す。冥て善をなし、道を行ひ德に進ます。壽をへ身死して當に獨り遠く去る。趣向するところあれども、善惡の道よく知るものなし。

世間の人民、父子、兄弟、夫婦、家室中外の親屬、まさにあひ敬愛して、あひ憎嫉することなかれ。有無あひ通じて貪惜を得ることなかれ。言色つねに和して、あひ違戻することなかれ。

或時は心に諍ひて恚怒するところあり。今の世の恨のこゝろ微しあひ憎嫉すれは、後世には轉はげしく、大怨となるに至る。所以はいかんとなれば、世間のこと、かはる〳〵相患害し、即時に急に相破るべからずと雖も、然も毒をふくみ怒を蓄へ、憤

を精神に結びて、自然に剋識して相離るゝを得ず。みな當に對生して、かはるゞ〳〵直報復すべし。

人、世間愛欲の中にありて、ひとり生れ、ひとり死し、ひとり去り、ひとり來り、行に當りて苦樂の地に至り趣く。身みづから之を嘗けて、代るものあることなし。善惡變化して、殃禍、處を異にし、宿豫めに待ちて獨りまさに趣入すべし。遠く他所に到りぬれば、よく見る者なし。善惡自然にして行を追ふて生ずるところなり窈窈冥冥として別離ひさしく長し。道路おなじからずして會ひみること期なし。甚だ難く甚だ難し。復たあひ値ふことを得んや。

何ぞ、衆事を棄て、おの〳〵強健のときに曼んで、努力て善を勤修し、精進して度世を願はざらん。極めて長生を得べし。如何ぞ。道を求めざる。安所んぞ待つべき何の樂をか欲はんや。

【註】宇宙の法則は愛を理想とし因果應報の理法によつてすゝんで行きつゝある。

明と無明との戰爭をたへず繼續しながらすゝんでゐる。兄弟も唯ならぬ二人（明と無明とは一人がそなへてゐる二方面である）が同じ方向に同じ道を行くに劍で搏ちあひながらすゝんで行つてゐる。打てば打たれる、けれども進んで行きつゝある。惡は惡て報くはれ、善は善て報はれつゝすゝんで行きつゝある。

巴里でピーンと針金が鳴つた、夫れがおこすエーテルの波は濠洲に無線電信となつて感電する、人間のつくつた無線電信はわずかに濠洲までよりとゞかぬが、ために起つた針金の震動は宇宙のはて（光線が一秒に十八哩走る速力て一萬年間かゝつて達する一萬光年遠方にある星の世界より未だ遙な）まで行つてゐなければならぬ「毒をふくみ、怒を蓄へ、憤を精神に結びて、自然に剋識して相離るるを得ず、みな當に對生して、かはるゞ〳〵、相報復すべし」と

【字意】○齊等　ひとしいこと。○糜散　糜は碎て、くだけちること。○家室　一軒の家の中。○遊戻　反對すること。○恚怒　いかりいかる。○剋識　我が心に深くほりつけ識して忘れぬこと。○宮行

行に相當すること。業に相應して果報のくること。○殃福　わざはひとさひはひ。○窈窈　遠いことをいふ形容詞。○冥冥　闇いことをいふ形容詞。

是の如き世の人、善をなして善を得、道をなして道を得ることを信せず、人死して更に生れ、惠施して福を得ることを信せず、善惡の事すべて之を信ぜずして、之を然らずと謂へり。終に是とすることあることなし。

但、これに坐るが故に、且つ自からこれを見となし、かはる〳〵相瞻視すること先後おなじく然り。うたゝあひ承受するに、父教令をのこす。先人祖父もとより善をなさず、道德を識らず、身おろかに、神くらく心さがり、意とぢて、生死の趣、善惡の道みづから、見ること能はず、語るものあることなし。吉凶禍福、きそひて各これをなすに、一も怪しむもの無きなり。

生死の常の道、うたゝ相つぎ立つ。或は父、子を哭し、或は子、父を哭し、兄弟夫婦かはる〳〵あひ哭泣す、顚倒上下すること無常の根本なり。みな過去に當く、常に保つべからず。教語開導すれども、之を信ずるものは少く。是をもつて生死流轉し、休止することあることなし。

此の如き人、矇冥牴突して經法を信せず、心に遠き慮なくして各意を快くせんと欲へり。愛欲に癡惑せられて、道德を達らず、瞋怒に迷沒して財色を貪狠す。之に坐して道を得ず、當に惡趣の苦にかへり、生死きはまり已むことなし。哀なるかな甚だ傷むべし。

或時は室家の父子、兄弟、夫婦、一は死し一は生れ、かはる〳〵相哀愍す。恩愛思慕して憂念結縛す。心意痛著して迭に相顧戀す。日を窮め歲を卒へて、解け已むことあることなし。道德を教語するに、心開明せず、恩好を思想して情欲を離れず、昏矇閉塞して愚惑に覆はる、深く思ひ、つら〳〵計ひ、こゝろ自ら端正にして、專精に道を行ひ、世事を決斷すること能はず。便旋して竟に至る。年壽をはり盡きぬれば、道を得ること能はず、奈何ともすべきことなし。

【註】人死して更に生れるものか生れないものか知らぬ。肉體と魂とは別なものか畢竟一つのものゝ二方面たるにすぎないものか、夫れは知らぬ。一元論の大家につけば一元論とならう、二元論が時流に高く叫ばるれば之れに從ふも亦止むを得ない。宇宙が愛の調和體たることゝ此愛の調和體が因果の理法によつて進んで行きつゝあることだけには金剛堅固の信心を拂はざるを得ない。

車にのつてゐるものと車を引いてゐる者がある。肺病で菜葉の外食べられないものと達者で卵と肉を食ひ得るものとがある。檢事と罪人とがある。之等は皆舞臺の役者であつて、一幕すむと舞臺裏で、面白かつたなアと相會ふて相笑ふものだと信ずるのが正しいか、又は畢竟我々は造物主の玩具なのか。いや之等は因により果を受けて相報ひつゝあるものだと解する方が正しいか。

朝に生れて夕に死ぬものがある。慌しい何事だと云ふ事勿れ、其幼兒は其兩親に多く影響を及ぼす役目を終へたのであるから、朝に生れ夕に死すべく之れみな過去に當けたものであつても、他に及ぼす影響は必らず愛であるところに宇宙の愛は調和された愛であると思ふ。

【字意】○瞻視 ながめみること。○先人 父。○顚倒上下 顚倒はさかさまごとで、親が子に死に別れるやうなのをいふ。上下は順序のよいことで、子が親に死に別れるやうなのをいふ。○矇冥牴突 矇冥はくらいこと、牴突は牛の角つきあふやうにつきあたること。愚痴のためにくらくして道理につきあたること。○痛着 いたむこと。○昏朦閉塞 くらくとぢこむこと。○專精 一心にはげむこと。○便施 徘徊すること。うろ〳〵すること。

總猥慣擾して皆な愛欲を貪る。道に惑へるものは衆く、之を悟るものは寡し。世間悤々として憀賴すべきことなし。尊卑、上下貧富、貴賤、勤苦悤務して、おの〳〵殺毒を懷く。惡氣窈冥としてために妄に事を興す。天地に違逆し、人心に從はず。自然の非惡、先づ隨ひて之を興す。恣に所爲を聽して其の罪の極るを待つ。其の壽の未だ盡ざるに便ち頓に之を奪ふ。惡道に下り入りて累世に勤苦す。其の中に展轉して數

千億劫出づる期あることなし。痛言べからず、甚だ哀愍すべし。

佛、彌勒菩薩もろ〳〵の天人等に告げたまはく。我いま汝に世間のことを語れり。人これを用ふるの故に坐つて道を得ず。當につら〳〵思ひはかりて衆惡を遠離すべし。その善きものを擇んで勤めてこれを行へ。愛欲榮華は常に保つべからず。みな當に別離すべし。樂むべきものなし。佛の在世に曁ひ、當に勤めて精進すべし。それ至心ありて安樂國に生れんと願ふものは、智慧明達し功德殊勝なることを得べし。心の欲ふ所に隨ひて經戒を虧負して、人の後にあることを得ることなかれ。儻し疑の意ありて經を解らざるものは、具に佛に問ひたてまつれ。當にために之を說くべし。

彌勒菩薩、長跪して白して言さく。佛は威神尊重にして說きたまふところ快く善し。佛の經語を聽きたてまつりて、心を貫きて之を思ふに、世人實に爾り。佛の言ふところのごとし。いま佛、慈愍して大道を顯示したまふに、耳目開明にして長く度脫を得たり。佛の所說を聞きて歡喜せざることなし。諸天人民蠕動の類皆な慈恩を蒙りて憂苦を解脫す。佛語の敎誡は甚だ深く甚だ善し。智慧明らかに八方上下去來今の事を見そなはして、究暢したまはざることなし。いま我衆等度脫を得ることを蒙むる所以は皆な佛の前世に道を求めしのとき謙苦せしが致すところなり。恩德あまねく覆ひて福祿巍々たり。光明徹照して空に達せること極りなく泥洹に開入し典攬に敎授し、威制をもつて消化して、十方を感動せしめたまふこと窮なく、極なし。佛は法王として尊きこと衆聖に超えたまへり。普く一切天人の師となりて、心の所願に隨ひて、皆な道を得しめたまふ。いま佛に値ふことを得、復た無量壽佛の聲を聞きて歡喜せざるものなし。心開明することを得たり。

【註】語に言ふ、善を爲すに懶しいかにいはんや、惡をやと。之れは無爲である。すんで無我に愛をなせとの人生の眞相に達したものではないが、飜つて考へて見れば之れなどは未だ甚だよい方であるかも知れない。必要の前に刑法なしの所謂おの〳〵殺毒を懷く毒爪を藏したるものが我々の姿ではあるまいか。

【字意】○緯猥憒擾　總は都、猥は濁、憒は煩、擾は亂。世の中がすべて濁り、心煩はしく亂れてゐること。○恩々　いそがしいこと。○憀賴　たのみ力にすること。○恩務　いそがしいつとめ。○虧負　虧は缺、負は違。○蠕動之類　蠕は足なくして動くこと。蛇、蚓蚯のやうに、身を屈伸して行くものを蠕動之類といつたのである。一般にむしけらをさす。○去來今　過去、未來、現在。○謙苦　謙讓勤苦。へりくだりつとめること。○福祿　福は幸福、祿は俸祿。無形有形の福德をいふ。○泥洹　涅槃のこと。○典攬　經典のこと。○威制　威光で制伏すること。

佛、彌勒菩薩に告げたまはく。汝がいへること是なり。若し佛を慈敬すること有らば、眞に大善なりとなす。天下に久々にして乃ちまた佛まします。今われこの世において佛となりて經法を演說し、道敎を宣布して、諸の疑網を斷ち、愛欲の本を拔き衆惡の源を杜ぐ。三界に遊步するに拘礙するところなし。典攬の智慧は衆道の要なり網維を執持して照然として分明なり。五趣を開示し、未度の者を度し、生死泥洹の道を決正す。

彌勒、當に知るべし。汝、無數劫よりこのかた、菩薩の行を行じて衆生を度せんと欲ふこと、それ已に久しく遠し。汝に從ひ道を得て泥洹に至りしもの稱數すべからず汝、及び十方の諸天人民、一切の四衆、永劫よりこのかた、五道に展轉して憂畏勤苦すること具に言ふべからず、乃至今世まで生死絕えず、佛と相値ふて經法を廳受し、又また無量壽佛を聞くことを得たり。快きかな甚だ善し。吾、爾を助けて喜ぶ。汝、いままた自ら生死老病の痛苦を厭ふべし。惡露不淨にして、樂むべきものなし。宜しく自ら決斷して身を端し行を正くし、ます〳〵諸の善を作し、己を修め體を潔くし、心垢を洗除し、言行忠信にして表裏相應し、人よく自から度して轉あひ拯濟し、精明に求願して善本を積累すべし。一世の勤苦は須臾の間なりといへども、後には無量壽佛の國に生れ、快樂きはまりなく、長く道德と合明し、永く生死の根本を拔き、また貪恚愚痴苦惱の患なからん。壽は一劫百劫千萬億劫ならんと欲へば、自在に意に隨つて皆これを得べし。無爲自然にして泥洹の道に次かし。汝等、宜しく各精進して心の所願を求むべし。疑惑を求むべし。疑惑し中悔して、自ら過咎をなして彼の邊地の

七寶の宮殿に生じ、五百歳のうちに諸〳〵の厄を受くるを得ることなかれ。

【註】 彌勒は過去に於て大なる修業をなし、今釋迦の時此世界に生れ出で釋迦について修業し、今後なほ五十六億七千萬年の絶へざる修業をなしつゝ再び此世界に生れた暁に於て釋迦と同一の覺を開き佛となり、釋迦の如く一切の衆生を敎化し度脫すべき道程にゐるものてあるとせられてゐる。之はもとより假說てある、佛敎を以て荒唐無稽のことを說く〳〵と排斥し去るもの〵鋒を向ける處となる假說の適例であるが、印度人の國民性は、なんたとへ假說でも一見假說と判明するものをとらずして極めて精巧にして恰も眞實なりと思はせるような假說を立てること甚だ尠くない。彌勒菩薩に關する此想像說は無量壽佛の作者が作つたものてはないが、斯〳〵の如き情巧なる既存の說話を創作のうちに採つて利用することは誠に自然の行方てある、況んや彌勒の此の想像說たるや、釋迦の口から語られたものとして傳誦されて來てゐるに於ては法藏修業談のうちに織り込む絶好の材料てあらねばならぬ。

併し之はもとより事實の歷史的記述に神の豫言をプラスしたものではないが、創作者の眞意を窺へば一人彌勒ならなくもすべての讀者が即ち之てあることを云はんとしたものに相違がない。何となれば

わたくし（經文には汝）はいつの世幾億年の昔からかは知らぬが（經文には無數劫よりこのかた）何故かは知らぬが他を愛せよ！　との使命を與へられてー尤も此使命を與へられてゐることは同時に與へられ被せられた無明と云ふベールのためにはつきりわからないが——（經には菩薩の行を行して衆生を度せんと欲ふこと、それ已に久しく遠し）この與へられた使命をはたさんとする念は眞に火の様に燃えてゐるにかゝはらず、之れを知らないで己れを愛し他を傷けてゐる、だのに、他を傷けるときは、傷けられることによつて愛される結果、磨かれる結果を受ける他と接觸するように宇宙のからくりは出來てゐるらしい。一例を上ぐ

れば二人の子供（愛の使命についてはわれ〳〵はほんとに子供てある）の一人が他を撲る衝動をおこして、惡しみの念から、その子供の頭に出來てゐるもつとも痛さうな腫物を撲つた、撲られた子供は殊に痛い腫物を撲られたのてあるから眼が飛び出るほど痛かつたが、痛いと苦しんだけれども折柄化膿しておつた腫物は爲めに破裂して膿が飛び出してすつかり治つた、と云ふ樣な傷をつけることによつて愛する。愛せらるべき樣な他と、其時々々相接するように廻り合はせるように出來てゐる。夫れなれば思ふ存分にふるまつて他を傷け他を痛ましめてよいかと云ふに然りよい、夫れも愛てある、けれどもその己れが傷ける相手方は、傷けるわたくしを眞底に於て子の樣に愛して呉れる念を持つてゐる相手方であるが其の相手方でもかまはぬ傷けようと思へば傷けたがよい。傷けようと云ふ心のある間は結極亦傷けるだらう、傷けてよいかなアと考へるようになるのは傷けなくなる第一歩であるから、斯くて傷けんにも傷けられない心に達するのであるから。

此點について古哲は藥ありとて毒を好むなと云つてゐる——斯くて他を愛して今日に至つたのである（經には、汝に從ひ道を得て泥洹に至りしもの稱數すべからず）けれども苦んて來た（經には、汝及十方の諸天人民（中略）憂畏勤苦すること具に言ふべからず乃至今世まで生死絕えず）けれども今此創作に接し多少ともわかる點がある（經には佛と相値ふて經法を聽受し（中略）吾、爾を助けて喜ぶ。）

【字意】 ○拘礙 かゝはり礙へられて不自由なこと。○執持綱維 大綱を執り持つて失はぬこと。○四衆 四衆 四部衆、四部弟子ともいふ。比丘、比丘尼、優婆塞（在家の男の信者）、優婆夷（同じく女の信者）の稱。○憂畏 うれへ畏れる。○惡露不淨 露は露出、惡が表へあらはれて不淨なること。○表裏相應 心と行、口と心とを一にすること。○揾潤 たすけすくふ。○精明 專精明了。二心なく、はつきりすること。○須臾 しばらくの時間をいふ。○合眼 てらしあふこと。○無爲自然 覺の味をいふ。○中悔 途中までつとめたものが、急に氣が變つて今迄の修行を償のないものゝやうに思ふこと。中折れすること。○過咎 あやまちつみとが。○邊地 向上せりと雖も未だ都に入るほどに至らず徹底せざる境涯。（極樂）

戯曲 平等覺

第三場

（村地病院々長の私室、すべて洋風。上手より正面にかけて一體に白壁の壁。正面處々に窓あり、數枚の油繪は位置よくかけられてある。正面より下手にかけた屈曲のコーナーに一個と、下手の中央部に一個と入口がある。ドアがしまつてゐる。下手寄りに、高貴なる織物を張つた衝立。其直ぐ上手に應接卓に數個の贅澤なる椅子を配し、卓上に一輪挿に何か溫室咲きの花が生けられてある。上手壁下にソツファー、ソツファーの右はストーブ。ストーブには石炭が淡く燃へてゐる。其他書架、机、椅子、置物等配置よく置かれ、すべて隆盛なる村地病院々長の私室の體。

幕あけば村地恭助は手術着をきたるまゝストーブに尻を向けて、椅子にかけてゐる。内藤誠一と何事が低聲に話してゐる。

其處へ一看護婦が松平伯爵。伯爵の嗣子正盛、娘花世、家令及川を案内

してはいつて來る。）

松平伯爵――（中央よりなほ近く恭助に近づき。）先生。之れから引取らして貰ひます。永々といろ〳〵御厄介をかけました。厚く、改めて御禮を申します。（後ろを見かへり。）之れお前たちもよく御禮を申さんか。

正盛、花世――有がたう御座いました、先生……。

及川――色々有がたう御座いました。

恭助――（若々しげに。）もうお歸りですか、では御大事に。

伯爵――何と云つて感謝すればいゝか。言ひ樣がありませんぢや。子供だけぢやないわしもあんたに救けて頂いたも同樣ぢやから、いや實に有がたい事と思つてゐますぢや。

恭助――いや〳〵。どうして――。

伯爵――あれ等が惡いとわしも惡い、若しあれ等が死んだらわしも死んだらう。あゝ子供と云ふものはもう此金になると唯一の寶ぢやから。娘の方が赤十字で駄目だと云はれた時の事を思へば、今はこうして親子揃つてあなたの病院の表を出るのはなたから命を與へて貰つた樣なものぢやから。

恭助――いや醫者が病人を治すのは商賣ですから、何も感謝されるわけはありませんよ。

伯爵――いや〳〵、さう云はれると困る。商賣人ぢやない、命の親ぢや。あなたは特別ぢや。

恭助――（冷然と。）お二人が幸運であつたのですよ。

伯爵――あなたの樣な先生に會つたのはそれは幸運であつたに相違はないが、しかしそれだけぢやない、あなたは始めてわしが娘を運びこんだ時から助けてやると仰しやつた、わしは實はあれ以來安心しておりましたぢや、きつと治して下さると思へてね。

恭助――遇然てせうなあ。

伯爵――いやあなたの妙手によると思ひますぢや。こんな土地においておくのは、失禮ながら惜しい方ぢや、夫れでわしもいろ〳〵考へてはおりますからいづれ夫れはゆる〳〵御相談したいと思つてはおりますが今日は兎に角お暇する。何れ日を改めてお招きしたいと及川にも云ふておりますのぢやから其時は是非どうか來て頂きたい。

恭助――そんな事は却つて恐縮ですから平にお斷り申します。

伯爵――いや〳〵さう云はないで是非にも來て下さい。わしがお迎へに來ますぢや、で其時は其時の事として、之れは（袋中から小切手を出す）ほんの薄謝ぢや納めて下さい僅かぢやが壹萬圓。

恭助――壹萬圓！。

伯爵――娘と倅とわしとの命を壹萬圓で買はうと云ふのぢやない。夫れは夫れとして之は今日退院する時のほんのお禮の印ぢやから。

恭助――お志は有がたく思ひますが、わたしは頂戴いたしますまい。

伯爵――（やゝ氣色ばんで。）少ないと云はれるか。

恭助――そんな事を云ひません、賞ふべきわけがないからです。

伯爵――さう堅く出られると困るな。わしは赤裸々な人間で、御覽の通りてもあるし云ふたゞけの事しか思つてゐない男ぢやから。唯何もない印にすぎんのぢやからなあ先生。

恭助――わかつてゐます、あなたの事は兼て承つてもおりもしまするし、此度いろいろおつきあひを願つてゐる間によく御人格もわかりましたが、夫れと之れとは別問題て、之は頂戴出來ません。

伯爵――どうしてもおとり下さらんか。

正盛――先生、差出がましう御座いますがどうかお受けとり下さいまんでせうか。

恭助――（力强く。）あなたが受けとれと仰しやるか。

正盛――（少したぢろぎながら。）別にさう云ふわけでも御座いませんが。

恭助――夫れなれば、わたしよりむしろ（間。）伯爵！こゝにゐる此人にその壹萬圓をお上げになつたらいゝてせう。

伯爵――（驚いて誠一を見て。）此人にな？。

恭助――此人にあげられた方がよろしい。

伯爵――いづれあなにと差上けたものぢやからあなたが此人に上げろと仰しやれば上げもしますが、之れは一體どうしたわけぢやな、さうして此人はやはり此病院の先生ですかな。

恭助――いや此人はわたしの友人て、〇〇藥店の番頭さんです。

伯爵――その番頭さんに此金を？。

恭助――さうです、伯爵、その金を此人に上げ、さうしてあなたのすべての御誠意を以て此内藤君に感謝されたらよいてせう。

伯爵――え？　わからん。さつぱり譯がわからんが、どう云ふ譯かくはしく仰しやつて下さらぬか。

恭助――よろしい、今は機會だと思ひますから申し上げませう。（眞然と。）御子息！

正盛――（氣を呑まれて。）はあ、何か……。

恭助――あなたは此内藤君を知らんですか。

正盛――存じません其方は。

恭助――さうてすか、御存じなければ云つて上げよ、其人はね……！　此人は、日山園子さんの夫てす。

正盛――えつ？。（蒼くなる。）園子さんの？。

恭助――さうです。あゝ、園子さんにあなたは何をしたか、日山園子と云ふ婦人をどんなにしてもいいあそんだか、如何なあなたも忘れたとは云ひますまい、其

の日山園子はわたしの妹ですぞ。

正盛——え、先生の妹、先生の？。

恭助——いや、わたしの血をわけた妹ではないが、わたしの兄弟も唯ならぬ日山重三と云ふ友人の妹で、園子は、それでもわしを今でも兄さんと呼んでゐる。わたしは誠の妹以上に愛して来たものだ。わたしと日山重三とがあの園子の親の死んだ時以来わし等の手の内の玉として育てゝ来たものだ。其花の乙女をあなたはどうしたか。世にも惨酷なる方法を以て踏みにじつたぢやないか。人間が地球に現れて以来あんな奸悪な方法で婦人を凌辱したものがあらうか。園子はあなたのために肉體も魂も泥土の如くに踏み躙られてしまつたのてすぞ（段々強く。）その傷いて一夜のうちに枯木の様になつてしまつた若い死骸にせめてもの慰を精神上に與へて呉れたのが此の誠一君だ。我々、日山重三とわたしとが魂を根こそぎ引ぬかれしまつてゐる傷いた園子を何んとしていゝか、我々て困惑し切つておつたのを精神的にも肉體的にも助けて呉れたのが此人だつたですぞ。園子を助けるためにあなたに穢された園子を妻にして救ひを完成したのが此内藤君てす。風のたよりでもきいたかも知らんが、園子の肉體はあなたの激烈な病毒を受けたんだ……。

正盛——えつ！。

恭助——さうてす、あなたが今日まて百數十日を費してやつて絶大なる苦痛から脱れる事の出來た、其苦痛をすてに乙女たる園子にあなたは植ゑつけたんだ、泥の中に蹴り倒された上に其眞體の中部まで病毒てけがされたんだ。魂はあなたの魔の様な黒印を焼きつけられて、ぐたく〳〵にくづれてしまつたんだ。

正盛——あゝ。實にすまないことてす……。

恭助——あなたもすまないと思はれるか、園子があなたの慘虐な凌辱を受けた時誰が許してもわしは許さんと叫んだのは此村地恭助だつた。天と地との全部を以てしても之れを償ふ事が出來ない、俺れは承けがはんと叫んだものだつた。松平家の

人々を鏖殺しにしてもなほ癒へんと怒號したものはわたしだつた。

伯爵――あなたが？　あゝさうでしたか。

恭助――さうです。伯爵、無用に驚かれな。其時の園子と園子の周圍のもの丶心痛はあなたが二人の愛子の死の枕邊にたつた時よりももつと遙に深刻なものだつた。もつと大きなものでありましたぞ。しかし本人も、さうした周圍のものも、死よりもつらひ凌辱に堪へた、やつと堪へた。夫れは此の内藤誠一君の大きな人格に慰められ覆はれ辛ふじて堪へられたのでした。けれども其當の人間が、しかも其人の妹までが私の病院に、私に無限の信任を拂つてはいつて來たのを見て、私の其まで堪へておつた憤激は一時に爆發して、わたしの胸は其兄と妹とを復讐の犧牲に供する事の出來る愉快さに高鳴つた位だつた。苦しめ、窘め、惱ましめ、さうして……。

伯爵――さうして？。

恭助――最も文明的の極刑に、いや私刑を執行するつもりだつたのです。さうしなければ腹が癒へなかつたからです。

伯爵――あゝ、さうまで惡くまれた二人を、反對に助けてやつて下されたか。

恭助――治して上げた。事實は治して上げたが、今は見事に全治して、今日わたしの病院を喜び勇んで親子三人が、わたしに感謝を捧げて退院して行くを見ると、あゝ如何に内藤君に說き伏せられたからだとは云へあまりに殘念に思はれますぞ。

正盛――御尤もで御座います。（泣く。）

恭助――生かすも殺すも俎上にのせた仇敵で、しかも打ちやつておけば、いな一通りの手當では一人は決して治らない。一人は必らず死ぬものを、稀れに見る良好の經過をとらして、苦しい感謝を受けて病院の門を出すことを恨まずにおられないが之れも亦此内藤君に說き伏せられた結果ですぞ。内藤君こそあなた等の命の親だ。

伯爵――あゝ何たる見上げた人だらう。

恭助――あなた等がわたしの病院に入院した、之は復讐を許す天の攝理だと思つた、

此事を恰も此の内藤君の宅で會合した日山重三に打ちあけて二人は祝盃を上げたものだつた。

及川――祝盃を！。

恭助――祝盃を上げるのに何の不思議がありますか。及川さん、あなたも惡むべき惡の片棒荷つた者はあなただ。あなたも生けてはおけんと叫んだものだつた。その洒〳〵たる面、何たる奸惡だ、惡むべき人間だ。何たる老獪だ。（間。）祝盃を上げた翌日此の内藤君が此病院に來て其復讐をやめて呉れと申込んで來た。わたしは聖人ぶるのもいゝ加減にしろと怒鳴つたものでした。けれども屈せずひるまずわたしを說いて我々夫婦は決して復讐を望んでおらんと云つたからわたしは赫となつて、此馬鹿野郎と怒鳴りつけたものであつた。無腸漢の出來ぞこない野郎と罵しつた事も覺えてゐる。さうしたら内藤君は、自分を罵倒して心が輕くなるなら幾らても自分を罵倒して呉れ、松平の代りに思ふ存分自分を罵つて呉れと云ひ出したのには、わたしは呆れた。それから松平の病氣を治してやつて呉れと賴んだのにわたしは張合も何も拔けてしまつた。呆然とする外はなかつた。呆然としてゐる私に人類の愛を說いて復讐の無意味なる事を說いた。いな復讐すべくんば仇を報ゆるに恩を以てする復讐せよと云ひ出したからわたしは亦赫となつて、貴樣は頭を二つもつてゐるのか、神なのか、人間なのか、神ならの正體を現はせ、人間なら人間らしくせよと罵り通したもんだつた。

正盛――内藤さん濟みません許して下さい。

恭助――どうしても復讐すると絶對に拒絶すると夫れから毎日の樣に病院にやつて來た。さうして人間相互は純眞に相愛さねばならぬと說いた。耶蘇の說敎なら十字街に立つてしろと罵つたら、すご〳〵と默つて歸つて行つた。其後姿を見て何と云ふ氣高い男だらうとわたしも思つた。けれども惡んで惡んで捻りつぶしてやりたいと

思つてゐるあなた等に對する復讐は決して思ひとまらんと誓いました。又やつて來て事實は既に相愛しあつてゐるのだから自覺して、もつと愛を深めたいと云ふて來た。わたしは駄目だ！　と拒ねつけた。此上此事をなほつべこべ云ふと君と雖も容謝はならぬと追ひ返へした。さうしたら御子息。おきゝなさい！。とても自分ではいけないと思つたか、今度は園子をつれて來た！。

正盛——えつ！園子さんを？。

恭助——あなたが命を奪ふよりも慘酷な目に會はした園子をして。あなたを許せと說かしむべく連れて來た……。

正盛——あゝ、噫。

恭助——園子も松平もあなたの愛子であつて、其一人が他の一人を斯くの如く傷けたとしたらあなたは今松平を責めんとするが如く其一人の愛子を責めるか、人間本來の面目は釋迦の樣にすべてのものを愛子と見ねば正しくない。わたしは、そう云ふ熱烈なる內藤君の主張に不圖反省の念がきざした。盲人に地藏菩薩の像を撫てしめて之れは佛の姿だと云つても、いゝや杖をついてゐるから之れは我々同樣盲人に相違ないと云ふであらう。松平があなたの愛子でないと云ふのは恰度、今の盲人の眞似をしてゐるものですぞと說いた。わたしは其時に斷然復讐の念を捨てました。先入主となつてあなた等に快い感情を持つ事は出來ないが復讐の念を捨てると同時に治して上げる方に努力して兎に角治して上げましたゝ併し誰に感謝すべきかと云へば云ふまでもない內藤君に感謝しなさい。

伯爵——あゝ內藤さんとやら、あなたは何と云ふ立派な人物だ。どうぞわたしに感謝さして下さい、心の底から……。（誠一の手を握り泣く。）

正盛——（誠一の他の手をとり。）內藤さんも園子さんもどうぞ許して下さい。お詫びはわたくしが後日如何なる方法を以てもするとして、わたくしは今內藤さんと村地先生の前で、今日までわたしのした惡行の千萬分の一でも償ひ得る樣に全力をあげて人の

爲、社會のため盡します。夜の眼も寢ずに寸陰を惜しんで死ぬまで償ひにかゝります
ことを誓ひます。

伯爵――わしもわしの持つてゐるすべての方を加へて内藤さんなり又は今けなげな決
心を立てた正盛の誓をとげしむるため役立てる事を誓はう。

花世――わたくしもお父さまやお兄さまの樣に人のためにつくします。

恭助――あゝ（天非を仰ぎ。）人一人の感化力は大きいものだ。

誠一――この樣にしてみんなが幸福に〳〵に向上しつゝあるのだとわたしは思つて
ゐます。

――（幕）――

小說平等覺（三）

彌勒、佛に白して言さく。佛の重誨を受けて專精に修學し、敎の如く奉行して、敢て疑ひあらじと。

佛、彌勒に告げたまはく。汝等能く此の世に於て、心を端し意を端しくして衆惡を作さゞれば甚だ至德なりとす。十方世界に最も倫匹なけん。所以は何、諸佛國土の天人の類は、自然に善を作して大いに惡を爲さゞれば、開化すべきこと易し。いま我れ此の世間に於て佛となり、五惡五痛五燒の中に處すること最も劇苦なりとす。群生を敎化して、五惡を捨てしめ、五痛を去らしめ、五燒を離れしめ、其の意を降化して五

善を持たしめて、其の福徳、度世、長壽、泥洹の道を得しめん。佛のたまはく、何等か五惡、何等か五痛、何等か五燒、何等か五惡を消化し、五善を持たしめて、其の福徳、度世、長壽、泥洹の道を獲しむる。

佛のたまはく、其一の惡といふは、諸天人民蠕動の類、衆惡をなさんと欲す。みな然らざるはなし。強きものは弱きを伏し、轉あひ剋賊し、殘害殺戮して迭に相呑噬す善を修することを知らず、惡逆無道にして、後に殃罰を受く。自然に趣向して神明記識し、犯せるものを赦さず。故に貧窮、下賤、乞匄、孤獨、聾盲、瘖瘂、愚痴、弊惡のものあり。也、狂、不遽の屬あるに至る。また尊貴、豪富、高才、明達なるものあり。みな宿世に慈孝ありて善を修し德を積みて致すところなるによりてなり。

【註】宇宙は愛の一大調和體であるが故に五惡あるものに此世に於て先づ五痛あり死後亦五燒を免れずと說けるものである。然り、五惡あるものに五痛五燒がなかつたなれば宇宙を愛の調和體なりと云ふことは出來ない。經驗は尊むべきものである、五惡のものに、五善のものと同一の果報を與へる樣な工合に宇宙が出來ておつたなれば五惡のものは何日の世にか五善のものになり得よう、五惡のものに對する五痛五燒はまことに愛の笞である。五惡のものは五痛五燒の報をうけて或は更に反抗的に更に猛惡を實行するかも知れぬ、左樣な邪惡な傾向を持つてゐるかも知れぬ、けれども何日かは猛惡に對する猛痛猛燒の愛の笞に目覺める時が必らず來る。こゝらあたりのなりゆきの正確に嚴乎たることは、まことに自然に趣向して神明記識し、犯せるものを赦さずと云ふべきである。

【字意】○重誨　叮嚀なをしへ。○倫匹　たぐひともがら。○五惡　人倫の五常の反對をいふ。○五痛　五惡の人がうける報のことで、來世でうける報を果報といふに對した語である。果を結ぶ前の華にたとへたものである。即ち來世に善處へ生るべきものが今世で先づ長壽富貴などの報をうけ、また來世に惡處に生るべきものが今世で先づ不幸難病などの報を受けるやうなことをいふのである。五痛の五はこゝではいろ〳〵と解すべし。○五燒　五惡の人がうける果報をいふ。○五善　仁義禮智信の五常。○剋賊　剋は殺、賊は害。○殘害殺戮　殘は傷、戮は殺。○呑噬　のみかむ。○殃罰　殃は禍。わざはひ。○神　明　神のこと。神は何處も明に知るゆゑ神明といふ。○乞匄　匄は乞と同義で、請ひ願ふこと。乞食。○弊惡　かたいぢなこと。○匪　狂　せむし、きちがひ。○不遽　遽は及で、人世に及ばぬ愚なもの。

世に常の道、王法の牢獄あれども、冥て畏れ慎まず、悪をなして罪に入り。その殃罰をうけ。解脱を求望すれども免れ出づることを得がたし。世間にこの目前に見ることなり。

壽をはりて後世に尤も深く尤も劇くして、その幽冥に入りて、生を轉じて身を受くること譬へば王法の痛苦極刑なるが如し。故に自然の三塗無量の苦惱ありて、轉その身を貿へ、形を改め道を易へて、受くるところの壽命、或は長く或は短し。魂神精識、自然に之に趣く。當に獨り値ひ向ひ相從ひて共に生れ、更りてあひ報復すべし。絶え已ることあることなし。殃惡未だ盡きざれども相離るゝことを得ず。その中に展轉して出づる期あることなく、解脱を得がたし。痛いふべからず。天地の間に自然にこれあり。即時に卒暴に善惡の道に至るべからずと雖も、會ず當に之に歸すべし。是れを一の大惡、一の痛、一の燒となす。勤苦是の如し。譬へば大火の人の身を焚し燒くが如し。

人よく、中において一心に意を制し、身を端し行を正くして、獨りもろ〳〵の善を作りて衆惡をなさざれば、身ひとり度脱して、その福德、度世、上天洹泥の道を獲ん。これを一の大善となす也。

佛のたまはく、其二の惡といふは、世間の人民、父子、兄弟、室家、夫婦、都べて義理なくして法度に順ぜず。奢婬憍縱にして各〳〵意を快くせんと欲ひ、心に任せて自から恣まゝに、かはる〳〵相欺惑す。心口おの〳〵異にして言念實なし。佞諂不忠にして言を巧にして諛ひ媚び、賢を嫉み善を謗りて、怨枉に陷し入る。主上明ならずして臣下を任用すれば、臣下自在にして機僞多端なり。度を踐み能く行ひて其の形勢をしる。位にありて正しからざれば、其れが爲めに欺かれ、妄に忠良を損じ天の心に當らず。臣は其の君を欺き、子は其の父を欺く。兄弟、夫婦、中外の知識かはるがはる相欺誑す。各貪欲瞋恚愚癡を懷き、自から己を厚くせんと欲ひ、多く有ん事を欲貪す。尊卑上下こゝろともに同じく然り、家を破り身を亡ぼして前後を顧みず、親

屬内外これに坐して滅ぶ。或時は室家、知識・鄉黨市里の愚民野人、うたゝ共に事に從ひ、更相に利害して忿り怨結となる。有るに富みて慳惜し、冥て施與せず。寶を愛して貪重し、心勞し身くるしむ。是のごとくして竟に至り恃怙する所なし。獨來り獨去りて一も隨ふ者なし。善惡禍福、命を追ふて生ずる所なり。或は樂所にあり、或は苦毒に入る。然して後乃ち悔ゆとも、また何ぞ及ぶべき。世間の人民、心おろかに智すくなく、善を見ては憎謗して、慕ひ及ばんことを思はず、但惡をなさんと欲ひて妄に非法をなす。常に盜心を懷きて他の利を悕望す。消散し糜盡して復求索す。邪心にして正しからず。人の色ること有るを懼る。豫め思ひ計らず。事いたりて乃ち悔ゆ

今の世に現に王法の牢獄あり。罪に隨ひて趣向してその殃罰を受く。その前世に道德を信せず。善本を修せざるによつて、今また惡をなせば、天神、尅識してその名籍を別つ。壽をはり神ゆいて惡道に下り入る。故に自然の三塗無量の苦惱あり。その中に展轉して、世々劫を累ね、出づる期あることなく、解脫を得がたし。痛いふべからず。

これを二の大惡、二の痛、二の燒とす。勤苦かくの如し。たとへば大火の人の身を焚し燒くが如し。

人よく中において一心に意を制し、身を端し行を正しくして、獨りもろ〳〵の善を作り、衆惡をなさずんば、身獨り度脫して、その福德、度世、上天、泥洹の道を獲ん。これを二の大善となす也。

【註】人の性の固牢なることは何にたとへんか、王法の牢獄あれども畏れ愼まぬのは目前に見る處である。

魂神精識、自然に之に趣く、言簡なれども意を盡してゐる語てある。あの牢獄にはいれ、此役をなせと指揮するものを要すとせば手數が大變であるがさうでないと見へる。

二の惡に於て、人の性は惡なりの老子の言を思はしむる。愛と無明との爭鬪で

あるが靜慮一番すれば遂に愛は無明を破るべき力を有することに決思することが出來る。

【字意】○幽冥　くらいところ。○法度　人倫の道のこと。父慈、子孝、兄頁、弟悌、夫義、婦聽などをいふ。○欺惑　だましあふこと。○佞諂不忠　心がまがつて忠でないこと。○巧言諛媚　巧言麗色のことと。諛は言につやつけること、媚は形につやつけること。○陷入怨枉　罪のないものを怨んで、曲げて罪におとしいれる。○機偽多端　機はからくり、いろ〳〵のからくりを設けて僞ることをいふ。○踐度能行知其形勢　忠良の臣は國の法度を踐みまもつて、時の大勢を知つてをること。○中外知識　朋友のこと。○欺誑　あざむく。○厚己　我身のためになるやうにはかる。○憎嫉　にくみそしる。○慳惜　しはく、おしむ。○恃怙　たのみにする。○剋識　記識に同じ。

彿のたまはく。其の三の惡といふは、世間の人民あひ因りて寄り生じて共に天地の間に居る。處年壽命よく幾何なることなし。上に賢明、長者、尊貴、豪富あり。下に貧窮、廝賤、庬劣、愚夫あり、中に不善の人ありて常に邪惡を懷けり。但婬佚を念ひて煩胸の中に滿ち、愛欲交亂して坐起安からず、貪意守惜して但唐らに得んことを欲ふ。細色を眄睞して邪態外に逸なり。自妻を厭ひ憎みて私に妄りに入出す。家財を費損して事非法をなす。交結聚會して師を與して相伐ち、攻劫殺戮して强奪不道なり、惡心外にありて自から業を修めず。盜竊して趣かに得れば欲繫事をなす。恐熱迫脅して妻子に歸給す。心を恣にし意を快くし、身を極めて樂をなす。或は親屬において尊卑を避けず。家室中外患へてこれを苦しむ。亦また王法の禁令を畏れず。是の如きの惡、人鬼に著され、日月も照見し、神明も記識す。故に自然の三塗無量の苦惱あり。其中に展轉して世々劫を累ねて出づる期あることなく、解脫を得がたし、痛いふべからず。

これを三の大惡、三の痛、三の燒となす。勤苦是の如し。譬へば大火の人の身を焚し燒くが如し。

人よく中において一心に意を制し、身を端し心を正しくし、獨りもろ〳〵の善を作

りて衆惡をなさゞれば、身獨り度脫して、その福德、度世、上天、泥洹の道を獲ん。

これを三の大善となす也。

佛のたまはく。その四惡とは、世間の人民善を修せんと念はず。うたゝあひ敎令して共に衆惡をなす。兩舌、惡口、妄言、綺語、讒賊鬪亂す。善人を憎嫉し、賢明を敗壞す。傍に於て快喜して、二親に孝せず師長を輕慢し、朋友に信なくして誠實を得難し。尊貴なれば自大にして己道ありと謂ひ、橫まに威勢を行じて人を侵易す。自から知ること能はず。惡を爲して恥ることなし。自から强健なるを以て人の敬難を欲へり。天地、神明、日月を畏れず。冥て善を作さず。降化すべきこと難し。自から用て偃蹇して常に爾るべしと謂へり。憂懼する所なくして常に驕慢を懷けり。

是の如きの衆惡、天神記識す。その前世に頗る福德を作ししに賴りて、小善扶接し營護して之を助くれども、今世に惡を爲して福德盡滅しぬれば、もろ〳〵の善鬼神おの〳〵共にこれを離る。身ひとり空しく立ちて復たよるところなし。

壽命終り盡きて諸惡の歸するところ、自然に迫促して共に之に趣き頓る。また其の名籍、記して神明に在り。殃咎牽引して當に往いて趣向すべし。罪報自然にして捨離する從なし。たゞ前の行に得りて火鑊に入り、身心摧碎して精神痛苦す。斯のとき無量の苦惱あり。その中に展轉して世々劫を累ねて出づる期あることなく、解脫を得がたし。痛いふべからず。

これを四の大惡、四の痛、四の燒とす。勤苦かくの如し。譬へば大火の人の身を焚し燒くが如し。

人よく中において、一心に心を制し、身を端し行を正しくして、獨り諸の善をつくりて、衆惡を爲さざれば、身ひとつ度脫して、その福德、度世、上天、泥洹の道を獲ん。これを四の大善となす。

【註】　人倫を亂るものを戒むることに至れりつくせりと云ふべく、すべて皆愛の眞目

的を度外してなす行爲心事である。

前世に福德を賴み、今世で尊貴、强健を得、之を以て自大にして人を輕慢し威勢をふるつて人を侵す、爲めに福德滅盡して命終れば諸惡に歸る、と云ふことはやはり之を認め之を恐れねばならんことであるが、之は愛の調和と如何なる關係を有するであらうか、思ふに愛の研磨によつて向上すると云ふ一大方向には變りはないが、大きな道程に於ける波の一起一伏ではあるまいか。或は先きに小福德をなして今小善果を得てゐるが、現に更に大福德をなし大善果を得んとつとめないに見ても、無明は少しく目覺めたけれども多く未だ冥愚におるが故に今一度屈して更に其の無明の目覺めをはかるところに愛の調和があるのではあるまいか。

【字意】○厮賤　位ひくゝいやしいこと。○庶劣　せむしなどであつて劣つたものゝこと。○婬妖　色慾にふけること。○眄睞細色　眄睞は邪視で、よこにらみすること。細色は好色美色で、女のなめらかな膚などをいふ。○交結棄會　徒黨をつくること。○攻劫　せめうばふ。○惡心在外　惡心より他人の財產などに目をかけること。○欲繫成事　欲繫は欲の煩惱のこと。欲のためにだん〳〵事を大きくする。○恐熱迫脅　惡事をするため心は落付かず。熱の出たやうに自ら恐れながら、而も他人を强迫し空元氣で脅かすこと。○兩舌惡口妄言綺語　これは十惡のうちの口に關する四種の惡である。二枚舌をつかふこと。わるくちいふこと、うそをいふこと、かざり言葉をつかふことをいふ。○讒賊鬪亂　人のことを讒言し、賊れて遂に亂を起す事。○傍　夫婦が父母の傍にをることをいふ。○自大　たかぶること。○侵易　おかしあなどる。○敬離　うやまひおそれる。○偃蹇　偃は臥す、蹇はあしなであつて愚であるために善事に腰のたゝぬことをいふ。○扶接　助持。たすけたもつ。○殃咎　とが。ばつ。○火鑊　火の鼎。○蹉跌　躓は足をふみたがへること、跌はつまづくことで、物のゆきちがひになることをいふ。

佛のたまはく。その五惡といふは、世間の人民徒倚懈惰にして、肯て善を作し身を治め業を修せず、家室、眷屬、飢寒困苦す。父母敎誨すれば目を瞋らし譬を怒らして言令和ならずして違戻反逆することを譬へば怨家のごとし。子なきには如かず。取與節なくして衆て共に患へ厭ふ。恩に負き義に違して報償の心あることなし。貧窮困乏にして復得ること能はず。幸較縱奪して放恣に遊散す。數唐に得るに串ひて用て

自から賑給す。酒に耽り美を嗜なみて飲食度なし。心を肆にし蕩逸して魯扈牴突たり。人の情を識らず。強ひて抑制せんことを欲ふ。人の善あるを見ては、憎嫉して之を惡む。義なく禮なく願難るところなく、自から用て職當して諫曉すべからず。六親眷屬の所資の有無、憂念すること能はず。父母の恩を惟はず、師友の義を存せず、心に常に惡を念ひ、口に常に惡を言ひ、身に常に惡を行じて、曾て一善もなし。先聖諸佛の經法を信せず、道を行じて度世を得べきことを信ぜず、死して後に神明更て生ずることを信せず、善を作せば善を得惡を爲せば惡を得ることを信せず、眞人を殺し衆僧を鬪亂せんと欲ひ、父母兄弟眷屬を害せんと欲ふ。六親憎惡して其をして死せしめんことを願ふ。

是の如きの世人、心意ともに然り。愚痴矇昧にして自から智慧ありと以ひて、生じて從來するところ死して趣向するところを知らず、仁ならず、順ならず、天地に惡逆して其中に於いて希望僥倖す。長き生を求めんと欲ふに、曾ず當に死に歸すべし。慈心に敎誨して、其をして善を念せしめ、生死善惡の趣、自然にこれあることを開示すれども、肯て之を信せず。苦心に共に語れども、その人に益なし。心中閉塞して、意、開解せず。

大命將に終らんとして悔懼こもごも至る。豫め善を修せずして窮るに臨みて方に悔ゆ。之を後に悔ゆとも將に何ぞ及ばんや。天地の間に五道分明なり。恢廓窈窕として浩々茫々たり。善惡報應し禍福あひ承けて、身自からこれを當く。唯も代るものなし。數の自然なり。その所行に應ひて、殃咎命を追ふて縱捨を得ることなし。善人は善を行じて、樂より樂に入り、明より明に入る、惡人は惡を行じて、苦より苦に入り、冥より冥に入る、誰か能く知る者あらん。獨佛のみ知しめすのみ。敎語をもつて開示すれども信用するものは少し。生死休まず、惡道終えず。是のごときの世人、具に盡すべきことかたし。故に自然の三塗無量の苦惱あり。其中に展轉して世々劫を累ねて出づる期あることなく。解脫を得がたし。痛言ふべからず。